
幸せの定理

天衣無縫

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸せの定理

【Nコード】

N0640X

【作者名】

天衣無縫

【あらすじ】

みおは幸せを願う普通の女子高生。けれど、兄妹のように思っていた幼なじみからの告白。揺れ動く感情。なかなか自分の気持ちに素直になれない。そして最後にたどり着く本当の幸せ。

・・・学園恋愛がテーマとなっています。若干のR15表現がありますが、可愛い程度になっています。甘くて、ちょっぴりせつなくて、でもやっぱり甘い。そんなお話です。感想などを頂ければ頑張る力になりますので、ぜひお願いします。

プロローグ

あることをきっかけに大きなターニングポイントにぶち当たる…。

そのきっかけは違えど、誰にも分岐点は存在する。それに気付くかどうかは運かもしれない。その選んだ道の先に待っているのは幸せか、はたまた不幸なのか。

それは歩んだものにしかわからない。

でも不幸を恐れて歩みを止めることはできない。こうして呼吸をして、まばたきをして、なんとなく過ごしていても時間は待ってくれないのだから。

自分の可能性が花開くか、そんなのかんけーない。

「道は自分でつくるもの！選ぶだけの人生なんてつまんないじゃん。」

一人の女子高生が今、分岐点をぶち壊していった……………。

第一話 日常風景

朝5時15分。新聞配達のため、あわただしく走りまわるバイクのおとが響くなか、とあるマンションのとある一室で目覚まし時計が騒いでいる。

数秒後、それは止められた。・・・いや、破壊されたと言っべきか。壁に叩きつけられた時計は無残な姿で散っている。

「あちゃーまたやつちやつたか。」

時計を壊した張本人である彼女は笠原みお。

高校二年の彼女は少々わけあって今は1人暮らしをしている。

「今日の帰りまた100均よってかないと。」

これは彼女の日常茶飯事のことと、こうして一日がはじまるのだ。

彼女の容姿は、髪は肩にすこし届かないくらいの黒色で、身長は158センチ。赤ブチの眼鏡をかけていて、周りから見ればだいぶ可愛い部類に入ってくる。だが、みおからしてみれば人並み以下らしい。

そんな彼女の通う学校は、自宅から電車と徒歩で大体30分くらいかかる。

朝食を食べ終え、身だしなみを整えて家を出るのは大体6時。

(七月にもなると朝でも暑いなあ)

パタパタとあおぎながら駅に向かう。

「お、みおじゃん。」

「あ、そら。おっはー。」

いま声をかけてきたのはみおの幼いころからの知り合いで、今も何かの縁なのか、同じクラスである、大和そら(やまとそら)。いわゆる幼なじみ(みおいわく腐れ縁)。

「そら今日は朝早いじゃん。」

「今日から俺たち二年の代だから朝練あんの。」

「でもそらは前からレギュラーだったじゃん」

「それはそれ。これはこれ。」

そついうそらを見てやっぱ見た目はやたらいいよなあと思うみお。

身長は176センチ。身体的に優れているわけではないが、劣っているわけではない。それよりも
ルックスがとても優れていて、それはそれは女子にモテモテだ。

みおは今まで何度も友人に、そらを紹介して！

と言われてはこんなやつのが良いんだと首をかしげるばかりである。

「そーいやそら。彼女はどうなった？」

「別れたよ」

「はい！？だつてこの前付き合い始めたばっか」

「何か飽きた。」

「たらし！最低！」

「褒め言葉としておくよ」

ギャーギャー騒いでいる間に学校につく。

「よーお二人さん。おはよう。」

「秋人か」

「おはよー鈴木君」

すずきあきと
鈴木秋人はそのチームメイトで二人のクラスメイトでもある。

「みおちゃん今日も可愛いねえ」

「そんなこと言ったら彼女が泣くよ？」

「ははは」

「相変わらず軽いねえ」

ちなみに秋人とは中学のころからの知り合い。

「じゃまた後でねー」

二人とグラウンドわかれ、教室に向かう。

みおの教室は2ー4。席は窓際の前から二番目。

みおは席につくと、少しのんびりとする。

みおは吹奏楽部なのだが朝練はない。けれど、この誰もいない朝の教室の雰囲気が好きなのでこうして早めに登校してくるのだ。

外からは朝練に取り組む運動部の声が聞こえてくる。窓から外をみ

ると、サッカーグラウンドで
そらと秋人がパス練習をしている。

二人とも去年からレギュラー入りしていて、昨年サッカー部を全国
まで導いた立役者なのだ。

しばらく外を見ていると、教室に1人女子が入ってくる。

「おはよー真央ちゃん」

「みおっちおはよう。」

真央ちゃん、こと金子真央はみおの親友で秋人と同じく中学のころ
からの仲である

「くうー。秋人かつこいいー」

「はいはいのろけはいいから」

「みおっち冷たいー」

そう秋人の彼女は真央なのだ。

「みおっちも彼氏作りなよー」

「興味ないからいらな〜い」

「頑固だなあ。みおっちは」

みおも実は彼氏が欲しくないわけではない。

ただ好きな人だとか憧れの人とかがいないだけ。

これからもずっと彼氏いない歴を更新し続ける気ですらいた。

今日の放課後までは・・・。

「で何の冗談？」

「だから冗談じゃないってば。」

みおは告白をうけた。それも一番近くにいた
幼なじみから。

第二話 告白。

ことの発端はその日の昼休みのことだった。

「みおーなんかおまえに用があるやついるから放課後に屋上にいつてくれるか？」

「私に？だれが？」

「それは行けば分かるから」

そらにそう言われ、みおの頭の上には？が増える一方である。

「なんか疑わしいから嫌。」

「え、いやほんと頼むってー！俺が言っただから心配ないだろー？」
「そらだから余計疑ってんの！」

ここまで彼女の拒否する理由とは今までの過去にあった。

こうしてよくわからないまま押しつけられては、その度にひどい目にあった。一つ例を挙げるなら去年のことだ。
全く同じように屋上に呼ばれ、目の前にいた見知らぬ女子にはたかれたのだ。

「っ！いきなり何すんの！」

「うるさいっ！私からそらを奪ったくせに！」

「はあ？なんで私がそらなんか」

「とぼけても無駄よ！全部そらから聞いたんだから！そらをその気にさせたことだって、一夜を共に過ごしたことだって、全部しってるんだから」

みおは啞然とした。そらを奪った？ましてや二人でそういう行為におよんだ？・・・ざけんな！

そこまで思った時にやっと全てを理解した。

みおを悪役にして、そこまでしてそらはもう飽きた彼女の処理を自分に押しつけたのだ。

「何よ！さっきから黙っちゃって！凶星だから何も言い返せないの！？」

「あのやろっ・・・。」

「へ！？」

みおの低く、ドス黒い声にその女生徒は思わず身震いをした。

「落ち着いて聞いてね。きつとあなたは・・・。」

そしてみおは自分の推理を、いやもうほぼ事実を話した。

「・・・そんな・・・。」

「急な話で信じられないかもしれないけど、

そらはそういうやつなんだよ。あなたはすごく綺麗なひとだから、そらなんかよりずっといいひとと結ばれるよ。」

「・・・うん。うん！ありがとう！なんかすっきりしたわ！さっきはぶっちゃってゴメンなさい」

「いやいいんだよ。相談だったらいつでもものるからね。」

こういった具合だ。ちなみにその女生徒とは今でも友好関係がある。

「とにかく、私はもうあんな目にあうのまっぴらゴメンだから！」

「だから今回はホント大丈夫だから信じて！」

「いやだっ『キーンコーンカーンコーン』」

そしてそのまま放課後に。そらを無視するならまだしも、他の人を傷つけたまま放置はできない。と、みおの良心が働いたのだ。そしていったん深呼吸をし、覚悟を決めて屋上のドアを開く。

「よ、みお」

「へ!？」

思わず間抜けな声が出てしまい慌てて口をふさぐ。屋上にいたのはみおを呼んだ張本人だったのだ。今度はそれも立ち会うのかと考えを巡らせたが

他に誰もいないためすぐに打ち消された。

そして考え込むみおにそらがこえをかけた。

「ねえ、みお」

「・・・!?!?」

「好きだよみお。俺と付き合って」

「・・・!?!?」

急な進展に声が出ないみお。そして無意識のままに逃げようとしていたみおの腕をそらがガッチリと掴む。

ここでテイクバック。

「何の冗談？」

「だから冗談じゃないってば。」

「だってあり得ないじゃん！」

「好きって感情に理由はいらないよ。」

「このキザ野郎。」

「褒め言葉としておくよ」

もうこの男に何を言っても無駄だと判断した
みおは掴まれたうでを振り払って

「ごめんなさい！付き合えません！」

とだけ言っ て屋上から逃げるよに走り去って
いった。

「おもしろくなってきたな・・・絶対好きにさせてあげるから。」

ニヤリと1人で笑うそらを残して。

第三話 一夜明けて・・・

「んー今何時・・・・・・・・ってええええ!!」

みおが起きたのは朝6時55分。これから登校しても普通に合う時間帯なのだが、普段よりは一時間も遅れている。

（あいつのせいで目覚まし時計買い忘れたー）

昨日あの後みおはばーっとしたまま気づいたら家に着いていたくらい気が動転していた。なにせ彼女にとっては初めて受ける告白、それも兄妹のように接してきた幼なじみからだ。

あまりに憂鬱過ぎるので今日は学校サボろうかと考えていたそのとき

『プルルルル、プルルルルル』

携帯に着信があった。相手は・・・今みおが最も避けたい相手からだった。

恐る恐る電話をとる。

「もしもし？」

『もしもし、みおか？どうした具合でも悪いのか？』

「まあ確かに悪いね、あんたのせいだね！」

『ホント？じゃあ責任とって看病しに行つてあげようか？』

「くんな！不快の極みだ！」

ブツッと電話を切る。

このままではほんとうに来かねないので今から

でも行くことにした。

（あーもうホント嫌んなる！）

電車にのつてる時も歩いている時も、ずっとブツブツつぶやいている。さすがに断つたのだからこれ以上何かは無いと思うのだが、しばらくはめんどくさそうである。

（はあ責めてこのことが誰にも知られてなければいいな）

淡い期待を抱いて教室の戸を開く。
するとクラス全員の視線が集まった。そして次の瞬間には歓喜の声
がクラス中に響く。

その期待は一瞬で打ち砕かれたのだ。

「「「キターーーーー！！！」」」

「みおっち！そら君に告られたってほんと！？」

「みおちゃん！ついに進展が！？」

前者が真央で後者が秋人である。

みおはやっぱ来るんじゃないかった、と後ろを振り返り帰ろうとした
のだが、それは遮られてしまった。・・・そらに。

「お、みお来たんだ？今から会いに行こうと思ったのに。」

「「「キャーーーー！！！」」」

「てつめえ余計なことしやがって」

「ん？照れてるの？可愛いな」

「！っ照れてない！」

さすがモテるだけあって慣れてるのか、そらは余裕の表情だ。けれどみおはそう行かない。

「「さっそくイチャイチャしてる！」」

けれどクラス中はヒートアップするばかりだ。

もうみおは我慢の限界だった。

「てめえらしい加減ギャーギャー騒ぐんじゃねえ！」

騒ぐんじゃねえ、じゃねえ、じゃねえ、ねえ……。

みおの声が響き一瞬にして静まり返る教室。

「……みおっち？」

「……真央ちゃん私もう帰るね」

「ちよっみおちゃん！」

みおは力なく秋人達に笑ってみせたあとに一気に走り去っていった。

秋人達は見逃さなかった。みおの目に溜まっていた涙を。

そしてまた教室にざわめきが戻る。

「あの笠原さんがこんなに怒るとはね……」

「普段大人しいほうなのにね」

「大和くんに告られたからきつと嬉しくて頭が混乱してるだけよきつと。」

「たしかにあんなイケメンに告られたら、嬉しくってジツとしてられないもんねえ。」

クラスの何人かが気の利かないことをつぶやく。

そのときバンッと教室の前から音がした。

前に立っているのは秋人と真央。二人とも険しい表情をしている。

「あんさあ、おまえら無神経過ぎるんじゃないかねえの?」

秋人の普段の様子からは想像できないような声に背筋がブルっとし、何もいえなくなる。

「みおっちはこういう恋愛慣れしてないの。」

それなのに囁し立てるようなこととして・・・」

続いて口を開いた真央の声でクラス全員に冷静さが戻る。

「俺たちはいまからみおちゃんのこと追っかけるから。お前たちも明日謝れよ。」

「私も少しのっちゃったからあまり偉そうなと言えないけど、みおっちの気持ち考えてあげて」

そう言って二人は教室から出て行く。

しばらく硬直していたそらはやっと覚醒した。

「待つて、俺もいくから!」

「そら君バカ？」

「いまおまえが行ったらみおちゃんもつと混乱するに決まってる？」

二人にそう言われ、そらは何も言えずにただその場に立ち尽くした。

「はあ、やつちゃったな・・・」

みおは今高校近くの公園のベンチに座っていた。

みおはきれた事は後悔していない。それよりも泣いてしまったことに自分の弱さを感じていた。

いくら頭がパニックで少し弱くなっているとはいえ、こんなにあっさり泣いたことは無かった。

「明日からまた気まずいなあ・・・」

「・・・ん、ちゃん、みおちゃん！」

「ん？あ、あれ鈴木君に真央ちゃん？」

「あ、起きた！」

目の前にいたのは本来学校にいるはずの秋人と真央だ。時計を確認するとさつきから一時間経っている。

（ああ、寝ちゃったのか）

目をこすって眠気を覚ます。すると、真央がみおに思いっきり抱きついた。

みおはそこまで背は高くないが、真央は150センチくらいしか無いので胸の中に収まる。

「ゴメンねーみおっち！」

「ま、真央ちゃん。」

「ゴメン！ホントゴメン！まさかみおっちが泣くなんて思ってなかったから。」

「！泣いてたのばれてたのか・・・」

「あたりまえじゃん！だって私たち親友だよ！」

二人は抱き合って真央は泣きそうになりながら、みおはそれをなだめるようにしている。

「おーい俺のことわすれてない？」

「あ、秋人君いたんだ。」

「ひっどー！・・・それと、真央はこっち」

秋人はみおに抱きつく真央をほどいてギュッと抱きしめる。

「かわいい・・・。大好きだよ、真央」

「秋人・・・私も」

二人は唇をかさねる。

「あのさあラブシーンのところ悪いのですが、見てるこっちが恥ずかしいのでそろそろやめてくださいーい」

どこでスイッチが入ったのか軽く暴走ぎみなバカップルにストップをかける。

「あ、ゴメンみおっち」

「いやー泣いてる真央が可愛すぎるからつい」

（スイッチそこか・・・ってそれより）

「二人とも学校はいいの？」

「親友のほうが大事！」

「あ、そうですか・・・」

二人の息の合ったコンビネーションに半分感心、半分あきれるみお。

「今日はもうみおちゃん帰ったほうがいいよ」

「うん。私達も帰るからさ。みおっちも一緒に帰ろ？」

「真央はこのまま俺ん家な」

「きゃっ秋人のエッチ！」

「・・・。。。」

「「みおちゃん（みおっち）視線が冷たいよ」」

その後もいちゃつくバカップルをみて悩むのがバカらしくなったみ

おはどこかスッキリしたようだった。

第四話 片思い

みおはいつもよりもだいたい早い時間に家に着いた。すると、みおの部屋の前には人影があつた。

――――

（みおに悪いことしたな・・・）

一人取り残されたそらは席について、考え込んでいた。ちよつかいを出したのはそうなのだが、実際に好きな気持ちは変わらない。

なぜこんなにも急に話が進むのか、いや、そらはだいたい前からみおに思いを寄せていた。

それは中学の時に芽生えた感情だった。

中学に入るまで二人はホントに兄妹のようで、異性であることなど全く意識したこともなかった。

けれど、中学にも入るとそらとみおの身長差は大きくなり、互いに違いが出てきたのだ。

いや、でもそれだけなら好きという感情には至らなかったであろう。

そうきつかけがあつたのだ。そらにとってのターニングポイント。

それは、ほんとに小さな出来事だった。

体育の授業の時のことだった。普段は男子と女子で別々に授業を

するのだが、その日だけは女子のほうの体育教師が不在ということで、特別に男女合同で行うことになったのだ。

内容はバレーだった。そら達のクラスには、男子バレー部に所属している人がいなく、女子のほうにはバレー部が6人と、男子は体格的に勝れど、普通にやったら女子のほうが有利だった。だからバレーになったのだ。

1チーム6人編成で6チームのトーナメント戦になった。そらとみおは決勝で戦うことに。

みおのチームにはバレー部員が二人。そして文化部にするにはもったいない実力を秘めていたみおの力で決勝まで上がっていた。

対するそら達は基本スポーツは何でも上手くこなすそらを中心にバランスがとれたチームだ。

始まってからは、少し女子チームの優勢だったが、そら達も必死に喰らいついてとても熱戦となっていた。

半分くらい時間がたち、18ー14の女子チームのリードしていた時のことだった。

「大変！みおちゃんが！」

1人の女子が叫んだとき、みおを見ると、顔からは血の気が引き、明らかに具合が悪そうだった。

（やばい！あのままだと倒れるぞ！）

そらは無意識に走り出した。そしてスタートと同時にみおの体がぐらりと揺れた。

（間に合え！）

その場にいた全員が思わず目を閉じた。

けれど、いつまでも倒れる音はしなかった。

そらの反応が良く間一髪のところであつたのだ。

みおは気を失っていた。そして体育教師が駆け寄ってくる。

「笠原さんどうしたんだ！？」

「たぶん過呼吸だと思えます。昔からちょっと激しい運動するとうなつちやうんです。」

「・・・そうか。一応念のため保健室に連れて行ってやれ。」

「はい」

そう言つてそらはみおをおぶる。みおが運動部に入らないのは、こういうこともあつてのわけだ。

「失礼しまーす」

保健室の戸ガラスと開く。

しかし保健室の中には誰もいなかった。どうやら席を外しているようだ。

しょうがなく校医の先生がくるまでみおをベットに寝かせて待つことにした。

みおの様子もだいぶ落ち着いてきたようで、眠っているようだ。

ずっとベットにおろした時に、みおからいい匂いがした。幼なじみから感じた女子の匂いにそらは少しドキツとした。そして寝顔を見た時には完全に見とれてしまっていた。今まで何度も見たことのある寝顔だが、成長してからの姿ではわけが違う。

整ったリズムの呼吸に、眼鏡をかけているからこそあまり気づかないきれいな顔立ち。初めてみおに対してかわいいと思った。それはじめてみおを異性であると認識した瞬間だった。

それから好きという感情に変わるまで時間はかからなかった。

けれど、自分とはかく、みおはそう思っていないのだ。だから忘れるために無理して他の人と付き合ったりもした。

でもそれは無理だった。月日が過ぎるに連れてみおに対する思いは強まっていくばかりだ。

ついにたえきれなくなったそらは、人生で最高の勇気をふりしぼり、先日告白に至ったのだ。

.....

（・・・こんなことしてる場合じゃないよな。秋人達には止められただけ・・・俺はみおが好きなんだ）

頭の中を半ば強引に整理したそらは席をたち、そして走り出した。

途中で担任の教師とすれ違う。

「お、おい大和！」

「ゴメン先生！俺具合わりいから早退するね」

そして振り返りまた走り出した。

「・・・まったく具合悪いやつがそんなに速く走れるかよ・・・。今日だけだぞ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「はあはあ・・・」

そらは全力ダッシュでみおの家へと向かう。普段は30分かかる道を、そらは15分で走り切った。

チャイムを鳴らす。・・・だが応答はない。

冷静さを失っているそらには焦りが増す。

（みおに何かあったら・・・くっ！）

そしてもう一回チャイムを鳴らす。
悲しくもチャイムは静寂に吸い込まれていく。

「・・・そら？」

そのとき後ろから声がした。
一番会いたい、一番声を聞きたい幼なじみが目の前にいた。

そらとみおは向き合う。

「何でここに・・・ってそら!？」

話してる途中でそらに抱きしめられる。

「俺と付き合って」

「!だからそれは昨日断ったじゃ」

「でも俺はみおが好きだから。いつまでも待てるから。」

みおはスツとそらから抜け出す。
そして顔を見つめる。

「・・・ゴメン。やっぱり付き合えないしそらを好きにはなれない。」

「

そう言ってみおは家の中へと姿を消す。

そしてまたそらは1人で立ち尽くす。

「これからもつと頑張らないとな」

そらを選んだ道は正しかったのか。でもそらは確かに一歩を踏み出した。

第五話 突然の訪問者！！

ドアを閉めた後もみおはしばらくの間ドアに寄りかかってぼーっとしていた。

「明日から大変なんだろうなあ・・・」

みおは決してそらを嫌ってはいない。むしろ好いているのだ。ただそれが異性に対する感情ではないというだけのことだ。

そらとは物心ついた時からの知り合いだった。

会ってすぐから二人は仲が良く、両家の親同士は安心して二人を見守っていた。ケンカをしても親が介入する必要もなく自然と仲直りしている。本当に相性はよかったのだ。

少し思いふけていたみおは時間の経過を忘れていた。今は午後4時。朝慌ててたため何も食べていなかったためすでに空腹の限界だった。

（今から食べたらず中途半端だしなあ。いつそ一回寝ちゃおうかな・・・）

そう思うと急に眠気が差してくるから不思議なものだ。

そしてみおはベットに倒れこみ目を閉じた。

（最近忙しすぎたからな・・・少し休もう）

・・・・・・・・・・・・・・・・

「今何時？」

外はすでに暗くなっている。

「今は・・・8時か・・・」

さすがに朝のように寝坊はしない。

半分寝ぼけたままリビングに向かう。

「ん？・・・！！だ、誰がいる！？」

みおは今一人暮らしをしているのだから、本来誰もいるわけがないのだ。しかし台所のほうからは確かに人の話し声と、水の流れる音が聞こえる。

みおはゴクリとのを鳴らした。そして覚悟を決めて、おそろおそろ近寄った。

「！お母さん」

「あら、みお起きたの？」

「な、なんでいんの？」

「まあ。せっかく帰ってきたのにそんなこというなんてお母さん悲しい！」

「ってそれよりも・・・もしかしてお父さんきてるの？」

「いいえ。今回は私だけよ。ほら、今お父さんと電話繋がってるわよ？・・・お母さんとお父さんも昨日の夜繋がったけどね。きやつ！」

のろける実の母は無視して電話をとる。

「お父さん？」

『お、みおか？久しぶりだなあ！今すぐにも会って抱きしめてやりたいよー。・・・まあお母さんのことは昨日抱いちゃったけどな』

何も言わずに電話を切る。なんなら今すぐ折ってやりたいくらいなのだが、さすがにみおもそこまではしない。

「あんたはいつまで経ってもバカ夫婦だな」

「ま！そんなバカだなんて、みおちゃんひどいわ！」

はいはい、と受け流しながらみおはソファに座る。

「あと十分したらご飯できるけど食べるでしょ？」

「あーうん。もうお腹ペッコペコだよ」

みおの母親の名は葵^{あおい}。そして父の名は広輝^{ひろひかり}。二人とは別々に暮らしている。

それは葵と広輝はペアを組んでいるプロの記者で日本中にとどまらず、世界中を飛び回る忙しい生活を送っている。

だから、みおは一人暮らしをしているのだ。

忙しいとはいえ、さすがに何日かは休みがあり、その度にこうしてもどってくるのだ。

「はい。できたわよ」

「やったー！お母さんの手料理久しぶりだなあ！」

みおも料理は得意なほうだが、それは葵から学んだものであって、やはり本家にはかなわない。

「ねえ、みお」

「ん？」

「最近そら君とはどーなの？」

「ブーッ」

「ま、汚いわよお」

あまりの不意打ちにみおは食べていたものを吹き出してしまう。

「まあそのリアクションは何かあったのね？」

「！べ、別に」

「ま全部知ってるんだけどね」

そう言つて葵はケータイを見せてくる画面に映っているのはメールでその内容は

『葵さんの大事な娘さんはいただきますよ？』

でも今日告つて振られちゃいましたけど（笑）』

送信元は・・・言つまでもないだろう。

「それにしても振るなんてねーお母さんなら大歓迎よ？」

「はあ。そんなこと言ったらお父さん怒るよ」

「きやつお仕置きされちゃうわ！でも夜のお仕置きなら大歓迎よ？」

「あんたは何歳だ！！」

「って本題にもどすわよ」

ちっ！とみおは舌打ちをする。うまく話をそらすことを狙っていたんだろう。

「好きじゃないから振った。ただそれだけ。」

「でも付き合ってみようとか思わないの？」

「中途半端な気持ちで付き合えないもん。」

「まったく。変なところ完璧主義なんだから」

へーへー。と受け流す。どうもみおはこっちのほうには気が乗らないらしい。

夕飯を食べ終え、後片付けをする。

「悪いわねえ片付けしてもらっちゃって」

「いいよ、夕飯のお礼」

「じゃお礼の追加で一緒にお風呂はいる？」

「却下。」

「即答？・・・じゃあ一緒に寝る？」

「それも却下！」

「きゃーん葵ちゃん寂しい」

「はいはいかわいいから先お風呂入ってきなよ」

「ぶー！つめたーい！」

ブツブツ言いながらも風呂場に行ってくれたようだ。

（私もお母さんくらい素直になれたらいいのにな）

・・・・・・・・・・・・・・・・

「みお！」

「ふえ？あ、お母さん」

「あんたまた寝てたの？よっぱど疲れてんのね……。今日はもう寝て明日朝シャワー浴びて行きなさい？」

「うん……。そおするう」

（ホント眠そうな時のみおは兵器並にかわいいわね……。）

十人十色、隣の芝生は青い、とはよく言ったものである。

第六話 二人の進歩

浴室からはシャワーの音が響く。

今は朝の4時半。みおはさすがに寝過ぎたのか今日は目覚まし時計も、葵から起こされることもなく、自然と目が覚めた。

起きてすぐに体が少し汗臭いことに気づき、昨夜は風呂に入ることなく寝てしまったことを思い出した。そしてシャワーを浴びに行ったのだ。

数分して、音が止み、みおが浴室から出てくる。

みおはスタイルはいい方だ。胸も一般よりは少しあり、それなのに体重は45kg前後という理想的なスタイルをしている。

「ふーさっぱりさっぱり」

みおはドライヤーをかけ、髪をセットし、すぐに朝食の準備をしようとする。

するとまたもや台所からはいい匂いがしてきて、葵がいることに気づく。

「お母さん、どうしたのこんなに早く」

「あ、おはよう。・・・たまには母親らしことしてあげなきゃってね」

そしてまた鼻歌を歌いながら再開する

「ホントに抜け目のない人だ。」

みおは自分の母親に対して改めて感心する。

葵が台所から出てくる。手にはすごく美味しそうなオムレツやベーコン、食欲がそそられる。

「わーおいしそー！いただきまーす！」

「ふふふ。召し上がれ」

「……！なんでこんなふわふわに出来るのー？」

「それは愛する人のために作るからよ。みおも本当に愛せる人を探さない？」

「……しばらくはこんなにふわふわにできなくていいや」

「……相変わらずねえ。あ、そうだお弁当も作っておいたから」

と言って弁当箱を差し出す。

「ほんと何から何までありがとう」

「ふふっいいのよ。いつでも頼りなさい。私も今日中には帰らないといけないから。」

「ええっもう帰っちゃうの？」

「ゴメンねみお。また今度はヨーロッパ行かなきゃなんないのよ」

「次はいつになる？」

「わかんないわねえ。次はお父さんも連れてくるからね。」

お父さん、という単語にみおは一瞬険しい顔になる。

お父さんが頑固な人だから嫌い。……というわけではなく、むしろ甘甘過ぎて苦手なのだ。

「じゃ私そろそろ行くね」

「はい。行つてらっしゃい」

ガチャとドアを開けて、外に出る。今日もいい天気だ。そして今日行けば明日からはまた土日だ。そう思うとみおの足取りは自然と軽くなる。

そして駅に向かう途中でまたあいつに会う。

「おはよーみお」

「ん。おはよー」

「なあみお。」

「ん？」

「俺と付き合つて」

「やだ。」

あまりの即答にそらは苦笑する。

「これからは毎日好きだっていってあげるから」

「じゃあ私も毎日拒否り続けてあげるから」

二人はどうやら吹っ切れたようで、また前と同じように関係は戻りつつあった。

二人並んで校門をくぐる。まだ人もあまり来てないので、特に気にしたりはしない。

そしてそらは朝練へ、みおは教室に向かう。

「あ、おはよー」

「ん、あ！みおっち！おはよー！」

猪突猛進に突っ込んでくる真央をかわして話を続ける。

「真央ちゃん朝練は？」

「んーちよつと教室に忘れ物したの。でさー聞いてよ。秋人って昨日すごい！思わず壊れちゃうところだったよ。」

「へーへー。さっさと朝練行きな」

「みおっちつれないなあ。あ、ひよつとして妬いてる？」

「・・・。」

「はいすみません。今すぐいきます。」

そう言つて真央は走つていった。

真央はバレー部で、背丈がない分、リベロとして活躍している。

（まったく。誰が妬くか！）

ひとりでキレていると、教室に入ってくるのに気づかなかった。

「だーれだ？」

「！」

みおは手で視界を奪われ、一瞬動揺した・・・が。

「離してよ西森君」

「あははーさすが気づくの早いな」

西森拓也にしもりたくやはみおと同じクラスでサッカー部に所属している。

「ってか朝練はいいの？もう遅刻の時間じゃん」

「・・・そらが怖いし今からダッシュで行くと思います」

普段はあんなそらだが、部活になると急に目つきが変わり、厳しくなる。そらのファンいわくそのギャップがぐっとくるらしい。

・・・・・・・・・・・・・・・・

（そろそろみんなくる頃だな・・・）

朝練も終わり、一般生徒も登校して来る時間だ。

「あ、お、おはよう笠原さん。」
「ん、おはよー」

昨日あんなことがあってどこかよそそしいクラスメート達。

「あの。笠原さん。昨日はゴメンね・・・」
「ん？ああ、いいよ別に。ってかちなみに告られたのは事実だけど、私振ったから。」

若干の沈黙が流れる・・・。

「・・・ええ？ほんと？」
「なんだ今の時差は。・・・ほんとにほんと」

「ななな、なんで？」
「好きじゃないから。」

「ええー！・・・そら様が振られるなんて・・・。」
「誰だその王子様みたいなヤツは」

「あ、いつてなかったけど、私そら様ファンクラブの会員番号002番、副会長してます」

「はあー？ファンクラブ？」
「いまはNo.362までいます。もちろん他校生にもファンがたくさんいますよ」

みおはあぜんとした。まさか幼なじみがそんなに王子的存在だったとは考えもつかなかった。

「実は・・・今回笠原さんが告られてからファンクラブ内で反乱が

起きています。いまは私なんとか抑えているけど、ちょっと危ないです」

「・・・いい迷惑だね・・・。」

「でも付き合っていないって知ればすこしは収まるかも。まあここから先は副会長、中村琴美に任せてくだっさい！」

「よろしくね、中村さん」

「はい！できれば琴美で」

「うん、琴美ちゃんね」

クラスでも中心人物である琴美と仲が良くなり、これでクラス内については大丈夫だろう。

秋人が戻ってきた。ということはそろそろ来る頃だろう。

「あーおはようみおちゃん！」

「おはよー秋人君」

「真央まだ戻ってきてない？」

「あー今きたよ」

「秋人っ！！」

真央が秋人に後ろから抱きつく。

「おっと。どうした真央。また欲しいのか？」

少しからかうような秋人の誘いに真央は赤面しながらコクっとうなずき、二人は教室内で堂々とキスをする。

ヒューっとクラスから声があがる。

「俺もみおとあんな風にイチャイチャしたいなあ。ね？みお」

いつのまにか戻ってきたそらがみおの真後ろでつぶやいた。

「いや、ありえないから」

「大好きだよ、みお」

「キモい、やだ、無いわ。」

おおーっとクラスから声があがる。ここまですらを拒否できる女子は他にいないだろう。

そしてここまでそらが一人の女子に執着してるのも珍しく、クラスメイトからしたらかつこうのネタだ。

少し落ちついてきたように見えたが、それは嵐の前の静けさ。そしてみお達にまた新しい風が吹き始めるのだ。
った。

第七話 新たな風

みおはいつもどおりに帰宅する……。はずだったのだが、それすらも叶わなかった。

「みお、一緒にかえろ」

「ん、ああそら。今日は部活は？」

「今日はフリーだから。」

「そう。じゃ、私は真央と帰ろつと。」

「ひつど！」

「真央」

みおは真央に声をかけに行つたのだが、真央はすでに秋人と二人の世界に入ってしまったていた。

「真央、聞こえるかい？」

「ふふつ明日楽しみだね秋人。」

「そうだなみお。」

「おい」

「みお、もう諦めたら？もうこうなった二人は止められないよ……」

「むー。じゃあ一人で帰る！」

ふいっと向きを変えてスタスタと歩いていく。

「あ、ちょっと待ってよみおー」

後ろを追うようにそらもついて行く。

「そら様が翻弄されている・・・」

琴美が驚いた目をしながらボソツとつぶやく。それは琴美だけではなく、クラス全員がそう思っていたのだった。ベタベタし続けるバカップルを除いて。

「秋人・・・」

「真央・・・」

・・・

「誰も一緒に帰ることを認めてないけど。」

「ん？俺は、たまたま、みおの隣をあるいてて、たまたま、自宅が近所なだけだよ。」

「じゃさつきから話しかけてくるのはなぜ？」

「そりゃあ、道を歩いているときに、たまたま、知り合いに会ったらみおだって声かけるだろ？」

「・・・まあ確かに・・・ってちっがーう！

さつきからあんたのたまたまは全然たまたまじゃない！」

「みお、まだ明るいのに女の子がそんな玉玉、連呼するもんじゃな

いよ

「！！！！」

みおの顔が首元から真っ赤に染まっていっく。

「もう知らない！このドヘンタイどつか消えろー！！！！」

「褒め言葉として受け取っとくよ。」

ギャーギャーとまるでマンガのように騒ぎながら歩き続ける。

そらがふと後ろを振り返ると、そこにはチームメイトの姿があつた。

「拓也じゃねえか」

「ん、あ。そら。」

「おまえなんでこっちの方向に」

「まあ用事があつてさ」

「・・・ふーん。つてか拓也。もし次一回でも朝練遅れたらただじゃすまさね」ぞ

「はいはい。そらが怖いからもう遅刻なんてできないよ。・・・それよりも、二人ってまだ付き合つてないんだよね？」

「！もちろん！まだつていうかこれから未来永劫付き合うことなんてないよ！」

「みお、未来永劫の意味分かつてる？これからずつとつて意味なんだよ？」

「う、うん知つてるけど、それが？」

「もつすぐ付き合うことになるんだから、それは間違つてるよ。」

「だからありえねえつつつの！」

ビシッと一発そらの尻に蹴りをいれる。

予期せぬ不意打ちと、それ以上に激しい痛みにはそれはその場につずくまる。

そんなそらを尻目にみおは歩き出す。

「おい俺のことわすれてなーい？」

「あ、ごめん」

「ひどいなあ。あ、みおちゃんにちょっと言うておかなきゃいけないことあったんだった。」

「なに？」

「好きです！俺と付き合ってください！」

「「！！！！！！」」

その言葉で覚醒したそらと、この数日間で二回も告白を受けたみおは驚き、しばし無言になった。

「だって、二人は付き合っていないでしょ？だったら俺にもチャンスがあるじゃん。」

「！拓也・・・！」

「ね？だから俺と付き合わない？笠原ちゃん」

まだみおは固まったままだった。それを見た拓也はみおに近づく。

『チュツ』

響くリップ音。拓也がみおの頬にキスをしたのだ。さすがにそれを黙って見てられるわけのないそらが二人を引き剥がした。

「いいかげんにしろ拓也！」

「おー王子様焦ってるね」

「てめえ！！！」

「やめなよ！！」

さっきまで何も話さなかったみおが声をあげた。

「道の真ん中で他の人の迷惑じゃん！」

「今はそんなことどうでもいい！」

「落ち着きなよそら！・・・それと、悪いけど付き合えないから。」

「えー残念。でも諦めないから」

「勝手にしなよ。もう私帰るから。ケンカしたいなら人目のつかないところですきなだけどーぞ」

そしてみおは少し早足で去って行った。

「拓也。おまえには絶対負けねえ」

「ははっ王子は怖いなあ」

拓也の余裕そうな態度にそらは怒りを覚えた。
だが、手は出さなかった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

プルルルル、プルルルル。

電話の呼び出し音になる。みおが電話をかけているのだ。あいては・
・

『もしもし』

「あ、真央？」

『おーみおつち。どした？』

「今から会える？」

『んー今から？・・・ちよつと待つてね』

真央が確認をとっている。まあおそらくは秋人にだろう。

『秋人いるけどいい？』

「この際いてもいいや」

『OK。じゃ、家きてちようだい』

「うん。じゃあね」

みおと真央の家は中学が一緒だったこともあり比較的近くにある。
秋人の家も同様だ。

「お邪魔しまーす」

「あら、みおちゃん久しぶりね」

「あ、おばさんこんにちは」

「ふふふ、ゆつくりして行つてね」

ありがとうございます、と礼をいい二階の真央の部屋に向かう。

（真央のお母さん相変わらず素敵だなあ）

真央の母親はすぐおしとやかで、どうして真央はこういう風になったのかたまに疑問を感じるみお。

「お邪魔しますよー」

「あ、みおっち。いらつしゃい」

「みおちゃん元気い？」

「あ、真央。服乱れてるよ」

「え！？さつきちゃんとなおしたのに」

「嘘だよ。・・・つかあんたらまたやってたんかい」

呆れながらみおは腰を下ろす。

「だって、真央がかわいすぎるからねえ」

「もう！秋人つてばエツチだから」

「んー？そういうこと言うと、もうしてあげないぞお？」

「それはダメー」

「イチャイチャしてもいいけどせめて私の存在は忘れないでよ」

あははーと真央は笑う。

「で、今日はみおつちどうしたの？」

「・・・なにもノロケたいわけじゃないからね。
・・・また告られた」

「そら君に？みおつち愛されてるね」

「違うの！・・・拓也君に。」

「「ええ？」」

その場にいた秋人も思わず声をあげる。

「なんで!？」

「知らないよ・・・いきなりだったし」

「へえ、拓也がねえ。そらはどんな反応だった!？」

「秋人君興味深々だね・・・。なんかきれてたよ。で、ウザかったから放置してきた。」

真央と秋人は顔を見合わせて苦笑する。

「さすがみおつち。」

「これは三角関係の始まりかな」

「秋人。みおつちがかわいそうだよ」

「ってか三角関係作る気ありませんから」

みおは体育座りをして顔を伏せる。

「なんかホント、めんどくさい・・・」

「みおつちモテ期だね」

「うー。嫌だよーホント勘弁して欲しい・・・」

よしよし、と真央はみおの頭をなでる。

「みおちゃんは付き合おうとか思わないの？」

「好きじゃないから無理」

「好きな人は？」

「いない。」

「んー。いないんなら付き合ってみればいいじゃん。そうすればいいところ見つかって好きになるかもよ？」

「私にはその考えがよくわかんないんだよね。そもそもあの二人のどっちも好きにはなれないと思う。」

「それは付き合ってみなきゃ」

「な・れ・な・い！」

「あ、そうすか・・・」

みおに圧倒され秋人はなにも言えなくなる。

「明日、明後日と休みなんだし、どこか遊びにいったら？」

「それはあり得ない」

「だってみおっち、つい最近までは一緒に遊びに行ったりしてたじゃん。」

「でもそれはあくまで幼なじみとしてであって・・・」

「ねえみおっち。」

「？」

「幼なじみだからって好きになれないなんてことないんじゃない？」

「でも兄妹みたいな感じに・・・」

「そうやって無理に押しつけて、考えることから逃げてるだけじゃ

ない？」

「！そ、それは・・・」

「自分の心に素直になって。そして少しでもいいから考えてみて。それが告白してくれた人への少しの恩返しになるから」

「真央・・・」

みおは普段感じたことのない雰囲気我真央から感じた。こんなところにあの母親から遺伝されたものがあつたのだ。

そしてみおは無言で部屋を出た。

「・・・今の真央かつこよかったぞ」

「えへへーありがと」

「今日はもう一回するか。・・・さっきより激しくな」

「いやーん」

「嫌なのか？」

「秋人のいじわる。・・・嬉しいにきまつてるじゃあん」

「ふう・・・。自分の心に素直に・・・かあ」

このような気持ちになったのは初めてだった。今、みおの心は大き

く揺れ動いている。

第八話 ひと時の休息（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます！

第八話　ひと時の休息

騒がしかったこの一週間の戦いも一時休戦。土曜日となった今日は、昨日の天気とは違い、大雨だった。まるで、みおの心を写すかのよう。

昨日こんどは西森拓也に告白された。そして三日前には幼なじみである、大和そらに。

そして昨日、真央から受けた言葉。ずっとそのことについて考えていた。

そらとは、本当に幼い時からの知り合いで、ずっと友達としてしか見てこなかった。恋愛対象として見たことは一度だってない。

拓也とは、今年になってから初めて知り合った。サッカー部ということで、そらと仲のいいみおと関わる機会も少なくなかった。

そんな二人から受ける告白。みおはあまり表情に出さないようにしていたのだが、戸惑いが隠せなくなってきた。

みおの初恋。それは幼稚園のときだった。しかも相手は20歳は歳のはなれた先生にだ。

いつも優しいそんな先生が大好きだった。

けれど、みおが卒園を迎える少し前、その先生は結婚した。お相手は同じ幼稚園の先生。職場内恋愛だった。今思えば素敵だなあと思えるけれど、幼いみおの心には裏切られた、としか思えなかったのだ。

・・・それ以来、気になるな。という人には出会えても、好きという感情になるひとはいなかった。みおは初恋以来、恋をしていないのだ。

「自分の心に素直にねえ・・・」

昨日からずっと呪文のように唱えている。

一方そらは、こちらも悩んでいた。

「拓也か・・・思わぬところに敵がいたとは」

そらにとって、拓也はまさに天敵のような存在だった。

そらがみおに振られた理由。それは幼なじみで、恋愛対象として見たことはないから。だった。けれど、拓也の場合はそれが無い。そのため拓也にはそらよりも障害物が少ない。

確かに拓也はそらほどモテたりはしないし、キヤーキヤー騒がれる

タイプではない。けれど、人懐っこい性格だし、好感は持たれやすい。それにかっこいい部類には入るのだ。

それにそらが拓也に勝るルックスのよさや、モテることも、みおの前ではまったく関係ないことなのだ。

だからそらは焦っている。

「もうのんびり好きになってくれるのを待つ。
なんていつてられないな・・・」

二人は悩む・・・そうして休みの片方はすぎていくのだった。

「うわ！結局昨日なんもしないまんま寝ちゃったよ！休みなんだからもつと有意義に過ごさないともつたいない！」

日曜日の朝。みおは少し寝坊をして起きたのは朝の9時ちょっと過ぎ。

さすがに無駄な時間を過ごしていると反省した。

プルルル、プルルルル。

そんなみおの携帯が鳴り響いた。

「もしもし？」

『あ、みお？今日空いてる？』

「なんだそらか……。あいてるけど」

『なんだ、ってひどいなあ。今日俺ん家来れる？』

「なんで？」

『母さんがさみしがってさ。たまには連れてこいって言うから』

「春子さんが？……なら行ってもいいけど」

春子はることはそらの母親である。

『ホント？母さん喜ぶよ。あ、あと秋人と真央さんも来るから』

「あの二人もくるのか……」

『ん？二人っきりのがよかつ「全然。」』

「じゃ今から行くから」

返事を待たずに電話を切る。

あの二人なら他人の家でも余裕でイチャイチャするであろう。それが少し憂鬱だったのだ。

そらの家まであるいて二分。ほんとに近くなのだ。

「春子さんこんにちはー！！」

「みおちゃん！久しぶりねー！」

「はい！ホントそうですね」

「みおちゃん来なくて寂しかったんだからー」

ささ、あがつて」

おじやましーすといってリビングに入る。

春子は本当に美人だ。この親あつて、この子ありという具合に、親子揃って顔がすごく整っている

「あ、みおっち！チャオ」

「みおちゃんチーッス」

「みおいらっしやい」

真央は秋人の隣に座って、手をつないでいる。

そらはテーブルをはさんでその反対側、みおを隣に座らせようと催促している。

春子の前であるし、うかつに抵抗はできないのでおとなしく従う。

「秋人君と真央ちゃんはホントに仲良しさんねえ」

「うふふ。だって将来は結婚するんだもん」

「だな。昨日は雨だったから家でずーっとしてたもんなあ」

「あーもうそれ以上なにも言うな！」

耐えかねたみおが口を挟む。

「そーいやみおちゃんとは彼氏君作らないの？」

「母さん！みおは俺のものだから！」

「誰がおまえのものになるつつた！？・・・あ、そうだ。・・・・悪いんだけど、秋人君とそらで、コンビニ行ってアイスでも買ってきてよ」

「えー今雨降ってるよー」

「秋人・・・空気読んで？」

「んー真央がそういうなら」

「俺もみおの頼みだし、しょうがない、いくぞ秋人」

二人はダルそうに出ていった。

「ふた리를追い出したってことはおとといのことについてだね？」

「おとといのこと？」

「あ、春子さんにも分かるように話しますから」

「春子さんはそらが私に、その・・・告白したことについては知ってます？」

「ええ。そらから聞いたわ」

「それなら話しが早いです。」

「みおっちはね、そらを幼なじみだからっていう理由で付き合い」とを拒否していたの。」

「まあ・・・でも分からないわけではないわね」

「はい。それで真央に自分の気持ちに素直になれって言われて、昨日一日考えてみたんです。」

真央と春子は真剣な面持ちでみおを見つめる。

「それで、結論は、やっぱり好きじゃないし、付き合いえないんです」
「！」

「あ、でも今までとは違って、これからはしっかりそのこと見つけて行こうと思う」

「みおちゃん・・・」

「みおっち・・・」

「それで好きになつたらしつかり伝えようと思う。でもそうじゃなかったら・・・やっぱり断るんだと思う」

「そつか・・・みおつちしつかり考えたんだね」

「さすがみおちゃんね。私ますます好きになっちゃったわ」

「それで西森君のことは？」

「西森君？」

「あ、おとといみおつちに告白した人なの」

「へえみおちゃんモテるのねえ」

「モテません。で、西森君についても私は全然知らないし、そらと同じようにこれから・・・になると思う。」

「そつか。ま、みおつちも成長してるってことだねー」

「そうね。みおちゃんこれから大変だろうけど頑張ってるね」

「まあ・・・めんどくさいけど」

そしてその後そら達も帰ってきて、昼ご飯もごちそうになって、みおと春子の料理は絶品だということ、真央は料理が苦手・・・もう苦手とは言えないくらい下手だということが分かった。

その後もたわいない話をして気づけば時間が7時近くになっていた。昼前からいたことを考えるとだいぶ長居してしまった。

「じゃ真央は俺がしつかり送って行くから」

「じゃ俺はみおを」

「近いからけっこうです」

「だーめ。家から近い方が事故率は高いんだから。それに誰かに誘拐でもされたらどうすんの？」

「大丈夫なのに・・・」

「私も心配だから・・・ね？」

「ううー」

春子に言われたらみおはしたがうしかないのだ。

「なあ、みお」

「ん？好きだったのは禁止ね」

「うわ先回りされた！・・・それ以外のこともなんだけど。」

「何？」

「拓也のことどう思ってるの？」

「！」

みおは歩みを止めた。それに合わせてそらも止まり、今二人は向き合っている状態だ。

「どうつて・・・」

「好きなの？」

ジリジリとそらは距離をつめる。

「好きじゃない！」

「それはホント？」

耐えきれなくなったそらはいつかのように、みおを抱きしめる。

「拓也にみおは渡さないから」

「・・・。」

「拓也になんか負けないから」

「ふっ男の子ってのは単純だなあ」

「!？」

「あ、放してくれる？」

みおはすつとそらから離れる。

「ま、私に迷惑かけない程度に好きにケンカでもしててくださいーい」

そしてみおはまた歩き出す。

「えーちよつと待ってよーみおー」

それを追うそら。

みおは確実に進歩している。日々強くなっていく。そんな彼女に寄り添って歩くのはそらか、拓也になるのか。

こうしてまた平日の学校がスタートする。

第八話　ひと時の休息（後書き）

ご感想など、お言葉をいただければ嬉しいです！

第九話 変わり始めた日常

一日明けて今日は月曜日。

週の始まりを好む人もいれば嫌う人もいるだろう

ちなみにみおは前者。人が慌ただしくしている雰囲気が好きなのだから。少しみおは変わっているのだ。

みおは教室に入り、いつもどおり、自分の席に着いて朝の時間をゆっくりのんびり過ごしていた。最近慌ただしかったので、いまこうして過ごす時間にとっても幸せを感じていた。

（朝の空気ってなんでこんなに過ごしやすいんだろ・・・ずっとこんな時間が続けばいいのに。）

しかしそんな願いもあと数分したら打ち砕かれることになるのだ。
朝練から彼らが帰ってくるのだ

「おはよーみお」

「おはよー」

「今日もかわいいよ」

「はいはい。脳外科医にみてもらって来な」

「脳は正常だよ？」

「じゃあ眼科かな」

「はあ、いい加減認めなよ」

そこに拓也が口を挟む。

「そーだよ笠原ちゃん。」

「うわっ二号まで来た!」

「二号?」

「ああ、そらが一号で、西森君が二号ね」

「! 拓也なんかと比べないでよ」

「俺も、二号つての。そらより劣るってことが気に入らないな」

「あ? やんのか拓也」

「決着つけとく?・・・もちろんサッカーで」

二人が睨み合ってるその隙にみおはこっそりと抜け出そうとする・・・が、それにそら達が気づかないわけがなく

「みお?」

みおはビクツとして走り出す。

それを見たそらと拓也も走り出す。

「げっもう追って来た・・・琴美ちゃんお願い」「はいです! 防御壁展開!」

琴美の力で壁がつくれ、そら達は進めなくなる

・・・正確にはそらフアンプクラブのメンバーがそらに群がり、廊下が塞がれてしまったのだ。拓也も巻き添えをくらい、みおは逃げ切ることができた。

みおは琴美にガッツポーズをし、それにこたえるかのように琴美もウインクを返す。副会長パワー恐るべし。

「はあ、はあ、ここまでくれば大丈夫だろ」

「なにが大丈夫だって？」

その声にみおはビクツとして振り返る。

「よつす、みおっち」

「なんだ真央かあ」

ホツと胸を撫で下ろす。

「朝から大変だねえ」

「うー。他人事みたいに」

「あはは、だって私は秋人とラブラブだもん？」

「く・・・」

「ま、頑張りなよ？考えるって決めたんなら最後まで戦わないと」
「うん・・・」

「私もサポートするからね？」

こつこつ恋愛関係のときだけは真央がとても頼もしく見えるから不思議だ。

H Rギリギリに教室に戻って行く。

席についてから約二名から視線を送られているような気がしたが、気のせいということにした。

昼休みになってみおは昼食と一緒にとろうと真央に声をかけようとする。

「真央」「みお（笠原ちゃん）一緒に食べよ」「

またもやこの二人だ。

「みおは俺と食うんだよ」

「そんな法律ないもんねー」

「今作ったから適用される！」

「じゃあその法律を撤廃する法律を公布します」

「ならその撤廃を撤廃する！」

「じゃあ撤廃を撤廃するのを撤廃・・・」

「今のうちにどっか行こ」

「そだね」

「あ、俺も行つていい？」

「秋人君か。まあいいよ」

そしてみおたちは戦線を離脱する。

「なら俺は撤廃の撤廃の・・・ってあれ、みおは？」

「あれ・・・いない」

「くっ！拓也のせいだぞ！！」

「ええ俺のせい？」

みお達は屋上にきていた。

「ふう。やっとのんびりだー。」

「にしてもみおちゃん大変だねえ。いきなり二人のやつに追いかけて回されることになっちゃってさ」

「そっか。秋人はまだ聞いてなかったもんね。みおっちねー今付き合おうか悩んでるんだよ」

「そうなの！？どっちと？」

「真央ちゃんの言い方は若干まとめすぎ」

「でも簡単に言うത്そういうことじゃ無いの」

「まあ、あつてるような違うような・・・でも好きになれなかったらやめるって条件付きね」

「あ、そういうことね。もう二人から猛アタックきてるし、こりや付き合う日も近いかな」

「どーでしょーねー。」

「みおっちてばシャイな子だから！」

「真央ちゃん、殴るよ？」

「きゃー秋人ーみおっちが怖い」

「怖がつてるやつが満面の笑みでいられるかつっの」

えへへーと真央が笑う。真央は女子らしく、みおにはない魅力がある。その魅力に秋人はゾッコンなのだ。

昼休み終わりのチャイムが鳴り、みおたちは教室に戻る。

「みーおー。酷いよー。罰として今日は絶対一緒に帰るんだからね！」

「はいはい。ついてきたきや勝手にどーぞ？」

「そーじゃなくて、お互いに楽しくおしゃべりしたりしながら帰るの！」

「あんたは乙女か！」

「可愛さはみおの足元にもおよびませんけど」

「・・・やっぱ一緒に帰って途中で病院に突き出してやる！」

「みおが診てくれるなら大歓迎だよ」

「・・・。」

「そんな可愛い目で見られちゃ照れちゃうよ」

「いつか殴ってやる・・・」

「そんなこんなで放課後・・・。」

「じゃ、6時に校門ねー」

「気分が乗ったらね」

「ふふ。みおは照れ屋さんだなあ」

「！・・・さっさと行け！」

そらは手を振りながら、グラウンドに走って行く

みおは四階に向かっていた。そしてそこは

「ん？あ、みおちゃんじゃない。どうしたの？」

「純菜先輩。どうもです」

「敬語使わなくていいのに。」

「先輩ですから、一応礼儀ですよ。今日はその、久しぶりに顔出そうかと。」

みおが訪れたのは、音楽室。吹奏楽部に珍しく参加しようとしたのだ。

「あら。でも今日は練習休みよ？」

「ええ！？そうでしたっけ？」

「さすが幽霊部員の名を欲しいがままにただけはあるわね。」

ははーと笑いながらぽりぽりと頬をかく。

「・・・まあ折角だし遊んで行ったら？」

「そーしまーす」

純菜はピアノを弾き始めた。

吹奏楽部に所属しているけれど、音楽センスは素晴らしいものを持っている。

（あーピアノ弾いてる姿すっごい綺麗だなあ）

みおはピアノを弾く純菜に見とれてしまっていた。そしてどうして自分の周りにはこんなにも美男美女が多いのだろーと疑問に思う。

みお自身もそのうちに含まれることに気づく日はくるのだろうか・・。

気づけば外は夕暮れ。時間は6時半・・。

「ん・・・6時半!？」

「どうしたの?なんか約束でもあった？」

「あ・・・」

そういえば約束、というわけではなかった。そらが一方的に言ってきただけなので、破ったことにはならないだろう。

「じゃ私帰りますね」

「ふふ。また来なよ?幽霊部員ちゃん」

みおは苦笑しながら音楽室をあとにする。

校門が見えたが、そこにそらの姿はなかった。

(・・・やつぱ帰っちゃったか・・・)

「ん!?!今私ショック受けてた!？」

そんなわけ無い!と自分の気持ちを静める。
自分の気持ちに素直になる話しはどこへ行ったのやら・・。

そんなみおは後ろからふわっと包まれた。

「っーかまーえた」

「！」

みおはドキッとして顔を赤らめる。

「もー来ないから捨てられたかと思ったよ。」

みおは一回深く息を吸って気を落ち着かせる。

「そもそも君を所持してないけどね」

「みおつめたーい」

（ふう。なんとか自然にできたか。）

「とにかく、離れてよ。帰り辛い。」

「じゃあこのまま抱っこして」却下「

みおは即答してぐっとそらから離れて歩き出す。

「楽しいなあ……。待ってよみおー」

そして二つの影は並んで帰っている。

みおの気持ちに大きな変化が起こり始めている。

第九話 変わり始めた日常（後書き）

お気に入りさんがまた増えました！感謝感激です

第十話 自分に素直に。

「琴美ちゃんちょっといい？」

「はい、笠原さんなんでしょう？」

朝、みおは学校にに来ていつものように朝の時間をみおなりに有義に過ごしたあと、登校して来た琴美に声をかけた。

「ええ！？まあ不可能じゃないですけど」

「うん。ならお願いできる？」

「はい・・・でもいいんですか？」

「うん、そうでもしないとね。・・・ってか何で敬語？」

「笠原さんは姉御的な存在ですもん！」

「あ・・・そう。ま、お願いね？」

了解です！と琴美は敬礼をする。

そしてその旨をちょうど帰ってきた真央に伝える

「朝練いつもお疲れ。」

「あ、みおっちー！！」

「はいはい、抱きつくのは秋人君だけにしときな」

「ちゃんと毎日抱きついてるからー」

「そーかい。でさ・・・」

と、みおが言いかけた時にそらが教室に入ってきた。

（これは説明するよりまえに見れるか？）

「おーいみおーおは・・・ってうわ！」

「そら様！」

「なんてかつこいいんでしょ！」

キヤーキヤーとそらの周りに群がる女子生徒。それを見たみおは琴美にピースを送る。それに琴美は苦笑いをする。

そう。早くもネタバラシとなったのだが、これが先ほど琴美に頼んだことだった。

普段そらファンクラブのメンバーは会長と副会長によって行動を制限されている。

具体的にいえば、こうして直接アタックしてはいけなく、見守つていようというのが、ファンクラブの入会条件の一つになっている。

しかし、このような条件があるのならファンクラブなどに入らず、自由に動いた方がいいのでは、とみおも思つたのだが、なにやら入会すれば特典があるのだとか。内容を尋ねたが、これから先は企業秘密なのだそうだ。

入れば分かると言われたが、そんなのに入るくらいなら、舌を噛み切つて死ぬ覚悟があるのだ。

ちなみにこのまえの防御壁もこの琴美の力を借りていたのだ。そして今日はその超超超ロングバージョン、一日中制限解除をしてもらったのだ。

「・・・みおっち、これ作戦なの？」

「あはは、嫌ウザかったからさ」

「素直になるって話しは？」

「あ・・・。んーと、あ！ほら！距離をおいた方がなんか気づくことがあるかもじゃん！」

「ふーん。みおっち今完璧に忘れてたでしょ？」

まさにぎくつと効果音が出そうなくらいに反応した。真央ははあとため息をつく。それを見て、何も言い返せずみおはただ苦笑する。

「みーおー」

教室に響く声に聞こえないフリをしながら。

・・・四時限目・・・

（ふう。文系に進んだのはいいけど、授業つまんないなあ）

みおはもとも数学が得意だった。数学に関しては楽しみすら覚えたくらいだ。

けれど、あまり理系に関して積極的に進みたいとは思わなかったのだ。流れに身を任せ、文系を選んだのだ。

授業が頭に入らないと、余計なことが頭に浮かんでくる。

（素直になるって言ったってなかなか厳しいんだよ）

ちらつと真央のほうを向く。真央は必死になって黒板を写していた。みおはなぜだかあまり勉強せずとも、テスト前にちよこつとするだけで点数は取れる。いつも20には入る学力を持っている。けれど、小さい頃から夢などはなくまあいつかはできるだろうと早16年。きつとこのまま普通の大学行つて、普通に就職するんだろうなあと。

「笠原。ここの答えは!？」

「え!？」

「83Pの2。」

「はい・・・」

（やつぱ、解いてなかった・・・ん？あ、簡単じゃんか）

「えと、set up a timetable for corrective actions .

・・・かな？」

「・・・よろしい。すわつていいぞ」

「はい」

（ふう。あーぶねー、昨日暇つぶしに入試問題解いとして良かったー）

・・・暇つぶしという考えが信じられない。生まれながらの天才はいないということだ。

そして昼休み・・・

「うーみおっちー勉強教えてよー」

「だよなあ。どうしてみおちゃんそんなできんの？」

「まあ授業聞いてりや何とかなるよ」

本当に頭のいい人ほどその努力はひけらかさないものなのだ。

「笠原ちゃん！おれも入れてよ！」

「げっこつちを忘れてた！」

拓也相手ではあの作戦は使えない。

（ここは我慢・・・）

「かわいいなあ、またキスしちやおうかな？」

「できるかあゝ！！！」

みおは走り出す！

それを追って拓也もゆっくりと立ち上がり、追いかけて行く。

数分後この前も逃げ切った場所にきていた。

「ふう。ここなら前も逃げ切ったし、大丈夫」

「じゃ無いんだなあ」

「!」

もうすでに、拓也は後ろにきていた。

「笠原ちゃんの行きそうなところくらい分かるよ」

「あんたはストーカーか!？」

みおは強気で対抗する。が、拓也は徐々に距離を詰めて行く。みおは後ろに下がろうとしたが、なるべく見つからないところに来ようとしたのが仇となり、後ろはもう壁だった。

二人の距離は近づく。

・・・5 m、3 m、1 m。

そしてもう直ぐに触れる距離まで近づいた時、拓也が口を開く。

「ねえ笠原ちゃん。・・・しっかり俺を見てよ。そらだけじゃなく、俺にもチャンスちょうだいよ」

「!だっ・・・!」

しゃべろうとしたみおの口は塞がれた。拓也がキスをしたのだ。しかも今度は唇に。

「はああ・・・何でこんなことすんの？」

「照れてるの？顔真っ赤・・・。前にも言ったでよ？笠原ちゃんのこと好きだって」

「っ！そんな・・・ん！」

また拓也はキスをするしかも今度は先ほどと違い深いキス。

拓也は舌を使い、みおの口の中を巧みに攻めてくる。始めてのことにみおは抵抗できず、ただされるがままになっていた。

（・・・やだ！怖い！気持ち悪い！）

唇が離れ、みおは大きく呼吸をする。

息は乱れ、顔は赤くなっている。

「・・・ホントかわいいな、もうずっと放したくないよ」

そう言つて拓也はみおをギュッと抱きしめる。

みおはもう抵抗したくとも、力が抜けてしまい、声すら出せなくなっている。

そして開放したかと思うと、また深いキスが始まった。そして、拓也の右手が制服の上からみおの一般より少し大きめな膨らみを触る。どんどん行為が危なくなっていく、ついに拓也がみおのシャツの中に手を入れようとしたそのときだった。

「みおっち！！！」

「みおちゃん！！！」

救世主が現れた。

秋人がみおから拓也を引き剥がし、力の抜けたみおを真央が支える。

「拓也！・・・強引なやり方は感心しないな」

「あーあもうちょっとで笠原ちゃんの全部手に入れられたのに」

「・・・でもそれは心は手に入れられない。もっとしっかりとした関係を築くのが優先じゃあないのか!？」

「・・・俺にだって余裕がないんだよ！

・・・ライバルは学園の王子みたいでファンクラブまであつてさ。そんなやつに勝つためにはそらよりも早くアタックするしかないじゃないか！」

「西森くん！それは間違ってる！・・・みおっちは見た目で判断するようないじゃないよ！相手が王子みたいだからって簡単について行くんじゃない!・・・西森くんもそんなみおっちだから好きになつたんじゃないの？」

「・・・っ!・・・俺は・・・どうしたらいい？」

「それは自分で考えなよ。みおっちはどんなひとに憧れる？好きな相手のこと、しっかり考えないと」

「・・・ゴメン笠原ちゃん。」

とだけ言つて拓也は去つて行つた。

そこで今脱力状態にあるみおに声をかける。

「みおっち大丈夫!？」

「きづいた・・・」

「え!？傷ついた!？どこ!？ケガしたの!？」

「違うの。私・・・気がついたの。自分の・・・素直な気持ちに。」

みおは拓也に抱きしめられ、心底嫌だと思ったし怖かった。

それはとても嫌なものだった。

「西森君は・・・冷たくて・・・こわ・・・くて・・・。」
みおの目からはしずくがこぼれる。

真央たちは一瞬驚いたが、泣きながらも頑張って話してくれる友人の目を見つめる。

「でも・・・あい、つに・・・抱きしめ・・・られ、た、時は、あつたかくて、優し、くて・・・。」

他人に自分のことを騒がれ、自分の弱さから泣いて早退したあの日。自分に素直になると決めたあの日。

あいつ、生まれてからずっと近くにいたあいつはみおを優しく包み込み、いつのまにか心の支えになっていた。

「私・・・そらが・・・好き。」

みおはまた一歩踏み出す。一歩は一歩でも大きな一歩だ。

「ねえ秋人？」

「ん？」

「みおっち・・・頑張ったよね」

「だな・・・。俺たちのときはあんな苦労無かったもんな・・・」

秋人と真央は中3の時結ばれた。お互い好きだと気づいた日が、キツカケが同じで、告白した声もハモってしまうくらい息がピッタリだった。

けれど真央たちの親友は違った。

片や熱烈にアタックを、片やそれを必死にかわす。

でもその思いは今日噛み合った。

その思いを知るのは真央と、秋人、そして本人であるみお。これから、みおはまたひと頑張りしなければならない。

「みおっちはいつ伝えるのかなあ」

「いつまでも来ないかもな」

「・・・否定しきれないのが怖いんだよね」

「そらはどうなるかな・・・」

全てを知る真央と秋人。そして自分の心に気づいたみお。今もみおを思うそら。

今、大きなターニングポイントが待ち受けている

第十話 自分に素直に。(後書き)

ちょっと急展開になってしまいました(汗

第十一話 自分に素直・・・ではなく？

・・・思いを秘めたまま月日は流れる・・・

そして伝わらぬまま、夏休み前の最終登校日の日。

長期休業前ということで、生徒はみな集められ全校集会が行われる。七月も末になり、非常に暑苦しい中集められる。前に立っている校長の話しをいっただけだけの人が真面目に聞いているのだろう。もちろんみおは聞いていない派だ。

(長いよ・・・暑いよ・・・)

しばらくすると、校長の話しも終わり、集会も終わりに差し掛かった時だった。

あともう少しだったにもかかわらず、みおは貧血を起こしてしまった。

過去にも貧血になりそうなきはあったのだが、いつもギリギリのところで耐えられた。

今日はたまたまいつもより数分長いだけだったのだ・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・

みおは目を覚ますと、天井が見えた。すこし薬品くさいことも考え
ると、どうやら気を失って保健室に運ばれたようだ。

少し頭に鈍い痛みがある。そこに触れると、やはりコブができてい
た。倒れた時におそらく打ったのだろう。

頭をさすりながら体を起こす。

（今何時だろ・・・）

確認をするためベットの周りを囲っていたカーテンを開ける。

「あ、笠原さん起きたの？」

「あ、先生。今何時ですか？」

「今4時を回ったとこよ」

「へっ!？」

校医の先生が指す時計を見ると、確かに4時ちよい過ぎだった。

「あの時まだ昼くらいだったから・・・私だいが寝てた!？」

「まあ呼吸は安定してたし、頭打ったみたいだけどそんなひどくは
無かったからねかしといたのよ。」

「もし万が一のことがあつたら？」

「大丈夫よ、私のかんは良く当たるもの」

「勘かよ」

ビシツとまるでお笑い芸人のようなツツコミを入れる。

「家に両親いないとこういう時大変よね」

「ははは、まあ少しズキズキしますけど帰るのに支障は無いんで」

「・・・いい友達（笑）がいて良かったわね」

先生が指を指した先にいたのはあのいつもの親友（？）達だった。

「みおちゃんおはよう。」

そこにいたのは秋人と真央、そしてそら。

けれど起きていたのは秋人だけだった。

真央は秋人に抱かれながらスヤスヤと、そらはテーブルにうつ伏せになって寝ている。

「あーごめんね？だいぶ待ったつしょ？」

「いやーさっきまでは先生も含めて騒いでたから退屈はしなかったよ。ただ真央達は寝ちゃったけどな。」

秋人はつん、と真央をつつく。

「んーむう。ふにゃ・・・。んー？もう朝？」

「真央寝ぼけ方凄いな」

「あ、秋人！」

二人は自然とキスをする。

「目覚めたか？」

「うん！バツチリ」

「はあ、ホントバカップルさに磨きがかかるね」

「ふふふー羨ましかつたらみおっちも早くーそらくんをゲットしな？」

「・・・こんなならいらんよ」

「んー。あ、みお起きたんだー」

「！そ、そらおはよう」

「なら起こしてくれば良かったのに。ところでなにがいらなの？」

「！！」

（ふう危なかった。あともう少し起きるの早かったら聞かれるところだった・・・。真央ちゃん、いや、真央のバカヤロー）

「さ、早く帰ろーか。ゴメンね私のせいで遅くなっちゃって。」

「んー？ま、いつか。うん帰ろっ」

うまく話しを変える方向に持っていけた。後ろでニヤニヤしている二人がム力つくところだが。

「ねえみお？」

「ん？」

このパターンは・・・

「俺と付き合って？」

ここで素直になれば付き合うのは容易なはず

「嫌だ」

けれど、もしそこまでみおが大人しく自分の気持ちを出せたなら、こんなに時間がかかるわけがないだろう。

そんなみおの気持ちを知る秋人と真央はどうしても歯がゆくなってしまう。

どうすればみおは全てをさらけ出せるのであろうか。

それは一生かけても解けない超難解問題な気がした。

結局そのまま普通に帰宅した。けれどまたもや、みおの部屋の前には人影があった。

「お、笠原ちゃん。だいぶ遅かったね。」

「・・・西森くん」

そこにいたのは拓也だった。

みおの頭をあの日の記憶がよぎる。

「そんな怖がんないでよ、もうあんなことしないからさ」
「。。。。」

「ねえ、笠原ちゃんさ、そらのこと好きっしょ」
「！」

「んーそうだなあ。ズバリ俺があんなことしちゃった日からかな」
「！！！」

「その顔は凶星だね？」

全て見抜かれてしまい思わず声が出ない。

「なんか悔しいなあ。俺がキツカケ作っちゃったなんてさ。ま、さすがにもう諦めるよ」

「ホント？」

「あんなことしちゃったうえに、もう心がそらに向いちゃったんなら諦めるしかね」

「。。。。西森くんには感謝してるよ。形はどうであれ、私の素直な気持ちを気づかせてくれたから。」

「。。。。やっぱ、いいな笠原ちゃん。お詫びと言っちゃなんだし、俺がいうのもアレだけどさ、一つ助言ね」
「？」

「笠原ちゃんは今自分の気持ちに気づけた。そしたら次も素直になり続ける必要は無いんだよ」

「。。。。どういうこと？」

「はは、それは自分で分かるうよ。・・・それに気づけばもう何も壁はないよ。」

それだけ言い残して拓也は去って行った。

（素直になんなくてもいい？）

拓也の言ったことが頭の中をグルグル回る。

ドアを開け、着替えをして、夕食を作って食べてるときも、風呂に入っている時も、ずっと考えたが答えは出てこない。

「あ、真央に相談してみよう！」

そして電話を鳴らす。

『もっしい？みおっちどした？』

「あ、真央？あのさあ、素直にならないってどういうこと？」

『はい！？』

「実は・・・」

みおは拓也に言われたことをすべて話した。

『あー！なるほど！・・・いやあその手があったか。西森くんやるなあ！』

「ちょ、真央どういことなの？」

『そーいや、やっと真央って呼んでくれるようになったね』

「あ、そーいえば。ってそんなことどーでもいいよ！」

『あははー。みおうち？西森くんの言うとおりだよ。それは自分で気づかないと意味ないもん』

「えー真央までそう言うの？」

『ま、今度は意外と早く気づけるんじゃないかな。じゃ、おやすみー』

「ちょ、真央！」

そして電話が切れる。

真央に話せば解決するかと思ったが、むしろ謎が深まったばかりであつた。

駄目もとで秋人にもメールで聞いてみたが、返事は真央と変わりなかった。

「あゝもう何なのゝ自分に素直になれって言ったり、今度はその逆く？」

不幸にも明日から夏休み。これでは真央に文句の一つも言えない。

（こんなめんどくさいんなら、好きになんなきゃ良かったー！）

しかし今更そんなことを言っても取り返しはつかない。みおは一度好きになった相手のことはなかなか頭から離れないのだ。

両思いなのになかなか結ばれない。あと少しなのに。あと一つの壁なのに。

みおにとってその壁は海より深く天より高く感じられた。

そして次の日から、みおはその壁を越えようと必死で挑んでいく。

第十二話 少しずつ。

「ねーみおちゃん。この後はどうするの？」

「えっと次にですね・・・」

夏休み初日、みおはそらの家にきていた。

「ねーみおーここどうやって解くの？」

「そら！今みおちゃんは私とお料理してるの！それくらい自分でしなさい！」

「まーまー春子さん。えっとそこはね・・・」

みおは春子と料理をしつつ、そらの夏休みの課題を手伝っていた。

みおはズバ抜けてできるものはないけれど、逆にできないものも無いのだ。基本的に中の上がみおにとっての普通なのだ。

「みおーもう終わっちゃダメ？」

「ダメ。」

「うーサッカーしたいよー」

そらはテーブルに突っ伏す。

みおは、素直にならない、この意味に気づくためとりあえずそらの家に足を運んだのだ

「・・・ねえ、みおちゃん。例の話しどうなったの？」

春子が小さなこえで尋ねてくる。

「ええっと、ちょっと今進展にくい状況でして・・・」

春子にはみおがそらを好きなことを伝えてある。そのときかなり喜んでくれたのはいいのだが、実際は上手くいかずに苦悩しているのだ。

「そうなの・・・。まあ若いんだからたくさん悩みなさい」

「春子さあん・・・」

「あらあら。みおちゃんがいつか義娘になる日が来るのね・・・」

「！さ、さすがに結婚は、」

「ないの？うちの息子とは遊びなの！？」

「ち、違いますし、まだ付き合ってませんから！」

「あら。じゃあやっぱり結婚はしてくれるのね。孫の顔が早くみたいわあ」

「春子さん・・・」

「ふふ。あながち冗談じゃないわよ」

「・・・さ、ラスト頑張っちゃいましょうか！そらも！早く終わらせちゃいなよ。お昼できるよ」

「「はい」「」

そして数分後昼食が完成した。そらのほうは今日のノルマは終わってないようだが

「はいそら。出来たわよー」

「そら・・・終わってないんだね？」

「わー美味しそうだなあー」

「話をそらすな！」

ちなみにみお達が作ったのはボンゴレパスタ。

「うわ、俺あさり嫌いなのにい」

「あんたは小学生か！」

「でもみおの作ったものならなんでも美味しいよ。」

「はいはい。早く食べてさっきの続き！」

「うーやっぱダメかあ」

そらは確かにスポーツはズバ抜けてできるものの、勉強はイマイチだ。さすがにこれで勉強も出来たら神は不公平だ。けれどさすがに人生はそう上手くはいかない。

「ふふ、あなた達夫婦みたいね」

「春子さん！」

「みお、付き合う段階飛ばして結婚しちゃう？」

「あんたまだ16だろうが！」

「来月になれば17だもんねー」

「どーでもいいよ、もう・・・」

「「「ごちそうさまでしたー」「」」

「あら、そら。ちゃんと残さず全部食べたじゃない」

「みおの愛情、いただきました！」

「作ったのはほとんど春子さんだけだね」

「愛情はみおちゃん担当なもの」

「は、春子さん」

みおも春子にはかなわないのだ。そしてその代わりに……。

「さ、早く終わらせちゃおう！」

「ぐへー」

そらをいじめるのだった。

（まったく。今更ながらどうしてこんなやつ好きになっちゃったんだか）

そして数時間後……

「もーダメ！死ぬ！」

「ここまでするのに時間かかりすぎ！でもこれで明日からすこし楽でしょ？」

「ふえー。みおってばほぼ今週分やらせちゃうなんて鬼だよ!」

そらは意外と飲み込みがはやい。教えたことはけっこうすぐにできるようになったので、いつそのこと今週分やってしまおうというわけだ。

春子にはさすがに退屈だったのか、とつても綺麗な顔をしながら寝息を吐いている。

「にしても春子さん綺麗だよねえ」

「そう? みおのほうがよっぽど綺麗だし魅力的だよ」

「いや、それはないって」

「んーみおってば照れ屋さんだなあ。・・・ねえ頑張ったご褒美ちようだい」

「勉強はご褒美の為にするもんじゃありません。」

「むー頑固だなあ。・・・あ! そうだ今週分の課題は終わったんだし、明日から暇じゃん?」

「? うん、まあ」

「じゃあさ海行こうよ!」

「はあ?」

ちょうどいいタイミングなのかどうなのか、春子が目を覚ました。

「海行くの・・・? いいんじゃないかしら」

「ええ! 春子さん!」

「なら決まりだね!」

「ちょ、他にも誰か呼ぼうよ」

「例えば？」

ふと頭に浮かんだのはあのバカップルだった

「じゃあ明日からでも」

「ええ！さすがにそれは真央達もキツイんじゃない」

「電話してみよっか？」

そう言つてそらが電話をかける。

「もしもし？」

『おーそらか。どした遊びの誘いか？』

「さすがは秋人。察しがいいねえ。・・・明日からなんだけど海いかね？」

『海？誰と？』

「こっちはみおが承認済みだよ。」

「承認してねーだろうが」

ガスツとそらに蹴りを入れる。

『なんか今鈍い音が・・・なら俺も真央に聞いてみるよ』

「お、今日は一緒じゃないのか？」

『ま、さすがに毎日やってたら体力持たないしな』

「うーうらやましいな秋人」

『あはは。でけっこう長旅になるだろうけどどうすんの？』

「やっぱ電車になるかな。一応予定は二泊三日ね」
『了解。じゃまた後でな』

「そら！？泊りなの！？」

「そーだよ？だって遠いから日帰りは辛いでしょ？」

「そーかもしれないけど……。でも二泊する理由はないじゃん！」
「それは俺たちの愛を深めるためだよ」

「！」

みおの顔が真っ赤に染まる。

「ん？みおなにに考えてるの？顔真っ赤だよ。……まったくエツチだなあ。」

「ば、バツカじゃないの？この変態が！」

こうして見てみると本当にカップル、しかもみおがバカにしていたバカップルなのだが。それでもまだ正式に付き合っていないのだ。

「ふふ。まあ楽しんできてね？」

「え！春子さんは行かないんですか？」

「若い人達の邪魔しちゃ悪いものね」

「そんな邪魔だなんて！」

「母さんナイス空気読み！」

そらはピースサインを春子に向ける。

「そら。あんまり弾けちゃダメよ？」

「な、何を言ってるんですか」

「そうだよ母さん。それは付き合ってからのお楽しみなんだから」

「一生あり得ないから!」

「みお好きだよ。俺と付き合って」

「だから、あんたは幼なじみなんだから!」

そこまで言ってみおは言葉につまる。

「んー残念だなあ。ま、もちろんまだ諦めないけど
そらはニヤツとする。」

（私が素直になる前にそらを拒絶していた理由。幼なじみだから。
・・・なんか嫌だ。でもなんで嫌なんだ？）

「んーみお？」

そらが顔を覗き込んでくる。

「!あ、ごめん考え事。」

目の前にあるのはつい最近、素直になることで初めて気づいた好き、
という感情を抱く相手。

「ふーん。ま、いつか。楽しみだなあ。明日から」

「・・・。」

（なんか変な感じ・・・）

第十三話 海！

「夏だ！海だ！！」

「真央元気だねえ」

次の日、みお達四人は予定通り海にきていた。朝の7時過ぎに出発したのだが海に着く頃には12時。だいぶ長旅だった。

「真央、一回コテージ行つて荷物置いてこようよー」

「はい」

昨日泊まり先についてもみおとそらは討論した。

「第一、今の時期から予約なんて取れるわけないじゃん！」

「あ、考えてなかった。」

「あら。それなら私の知り合いにコテージのオーナーしてる人いるから聞いてみようかしら」

今度は春子が電話をする。

そしてそんなに時間もかからずに

「ホントは一ヶ月前には予約があるんだけど昔の仲だしってOKしてもらっちゃった」

こうして泊まる場所も決まり、いざ。となったのだった。

「わーずいぶん立派・・・」

海水浴場から歩いて五分と近場にあるうえ、その大きさといえbaumう。

「ウチの母さんがこんなに凄い人と知り合いだとは・・・」

「ねえ中入ってみようよ！」

真央が先陣を切ってコテージに入っていく。それにみお達も続く。

そして中に入ってからまた啞然とする。

外見のみならず、内装も素晴らしかった。ここで一生暮らしたいと思っくらしいに。

「ほんと、こんないとこタダで借りて罰あたんないといいけど・・・」

「確かに」

「みおっちーほらー！こんなにお風呂広いよーー！！」

「真央はしゃぎ過ぎだよ」

でも確かに浴室も広がった。大人二人入ってもスペースができそうな浴槽（ジェットバス付き）に自分の家の風呂場の三倍はあろう広さだった。

それに、コテージ全体が木造のため、木のいい匂いもする。

けれどみおははしゃがずに、冷静に今後の予定を立てる。

「えっと、個室は・・・ちょうど4つあるね一人一つ、贅沢だホント」

「えー私は秋人と一緒に部屋で一緒に寝るつもりだったのに」

「真央、真央と一緒にだったら俺寝れないよ・・・襲っちゃって。」

「秋人・・・今からでも」

「うんよし。海行くか」

「そだね」

バカップルはとりあえず放っておく。

「ま、待ってよみおっち達」

「夏だ！海だ！！そして・・・水着だ！！！！」

真央が先ほと言ったセリフを今度は秋人が言った。

「おまたせー！」

早々に準備を済ませていた男子2人組のところへ、少々遅れたみおと真央がくる。

「「!!」」

「どう？ 秋人」

「かわいい・・・」

「べつに水着なんてなんでもいいのに」

「みお・・・すごいかわいいよ」

みおはなるべく露出が無いようにするため、コンビネゾン付きのドット柄ビキニだ。なお、海に入るため、眼鏡ではなく特別にコンタクトにしている。

いくら露出が少ないと言っても、みおの恵まれたスタイルだ。二つの膨らみが自己主張をしている。

いっぽう真央は、胸はあまり無いものの、やはりすらりとしていてスタイルがいい。

水着は、みおとは違い、三角ビキニでかなり露出が高い。

「いいよねえみおっちは胸あつて」

「ちょ、真央、揉まないでよ!」

みおと真央は互いに良いところを褒め合いながらいちゃついている。

「女子で触りあつてるのが・・・なんかエロい」

秋人はそういいながら二人に近づく。そして真央に後ろから抱きつく。

「確かにみおちゃんはスタイルいいけど、俺からしたら真央のほうが魅力的だよ・・・」

「うふふ、ありがとう。」

そういつて二人はキスをした。

「じゃ、俺もみおに・・・」

「触れんな」

「あ、はいすみません」

そう簡単にはいかないのが人生だ。

「早く海入ろうよ！」

「うん！行こっか」

「俺たちも！」

そういつてみんなで入っていく。

「気持ちいい！」

「油断してると・・・それ！」

「！ま、真央やったな」

「へへーんみおっちが悪いんだよー」

そういつて真央は逃げる、が急に深くなっところ足が取られてしまう。

「あ、真央危ない！」

真央はもとも背が高くない。だからみおならギリギリ足が届くところも真央の場合そうはいかない。

「きゃあ！」

沈みかけたときだった

「よっこいしょと。」

秋人が涼しい顔をして助けたのだ。

「もー真央は危なっかしいぞ？」

「えへーゴメン。秋人王子様みたいでかっこよかったよ」
「ばか。」

コツンと優しく叩く。

「秋人君もやるねえ」

「俺だってみおが溺れそうになったら地球の裏側からだって助けに行くよ！」

「あいにく私は真央みたいにバカはしませんからー」

「うーバカってひどいよみおっちー」

秋人に抱かれながら、真央が戻ってくる。

「じゃ、せっかく海にきたんだし、海といたらアレというものがあるでしょうか」

そらが提案をする。

「「「アレ？」」」

「ずばり、ビーチバレー！」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「ふっふっふー。バレー部の实力を見せてあげるよ」

数的にも2ー2。ペアリングは真央の願望で真央は秋人と、そして
みおはしぶしぶそらと。

「よしスタート！」

なんでやねん！とみおにつっこませるくらいちょうど良くあった砂
浜のビーチバレー用コートでだいぶ本格的に試合をする。

「うわ！そらくるな！」

「みお、危ないって！」

ゴチっという音を鳴らして二人はぶつかる。

「いててー今のは私ボールだったじゃん！」

「いや、俺のほうが近かったって！」

ぶつかり合う二人。それに対して

「ナイストスだよ真央」

「よし、いっけー秋人！」

真央がトスをあげて秋人が決める。まさに阿吽の呼吸でポイントを

重ねていく二人。

勝負は見たかと思われた。だがそれを負けず嫌いな二人が黙って
いられるわけがなく、

「とにかく、ボールのきたほうがあげて、そうじゃないほうが決める、いい？」

「・・・了解！」

もともと運動神経がいいみお達だ。コンビネーションさえあれば・

・

「くっ！」

「諦めんなそら！」

そらが弾いたボールをみおがダイブしてなんとか拾う。

「決めるよそら！」

「モチ！」

ズバンッと初めてみお達にポイントが入る。

そこからみお達の逆襲劇が始まる。

気付けばポイントが24ー22。みお達のマッチポイントだ。

最後はみおの渾身のスパイクを真央が上げそこね、勝負が決まった。

「よっし！」

「ナイスみお！」

パアンとハイタッチをする。

「うーみおっち達強すぎ！」

「あはは、まあいいじゃんか真央。楽しかったしさ」

「うー納得いかない！もう一回！」

「「「ええー！」「」」

・・・次も結局みお達の勝利だった。

「お腹空いたー」

「んーもう六時か。私も空いてきたしそろそろ夕飯にしようか」

「やっぱり？」

「ここは？」

「BBQ！」

最初がそらで、次が秋人。そして最後が真央と、見事な連携を見せる。

「でも道具は？」

「コテージに完備しております。」

「でも暗くなるしコテージの庭でになるよ？」

「かまわないよ」

「そか。じゃ、一回コテージ帰ろつか」

「「「おー」「」」」

海水浴場に備え付けのシャワーを浴び、着替えをする。

（おーだいぶ日焼けしたなあ）

水着の跡がくつきりと残って少しヒリヒリする。日焼け止めを塗っても焼けるには焼けてしまうのだ。

「ふーまだみんなきてないなあ」

みおは少しでもあの砂のじやりじやり感から脱したかったため少し急いでいたのだ。

「お、どうしたの？1人？」

いかにも地元のチャライ2人組が声をかけてくる。

「いや、友達を待ってるんです」

「へえ？じゃ友達くるまで俺たちと遊ばない？」

「いえ、結構です。」

「つれないなあ、ちょっと俺たちいい店知ってるから行こつよ」

1人に腕をつかまれる。思わず体がビクツとする。

放して、と言おうとしたが、その前にその男が吹き飛ばされた。

「つてえな！何すんだ！」

ぎゅ、とみおは抱きしめられる。今度は落ち着くような、暖かい感じだった。

「大丈夫？みお」

「そら・・・」

「無視すんじゃねえ！」

男がそらに殴りかかる。そらはそれをひよいとかわす。

「この子俺の彼女なんだけど」

「だからどうした！」

今度はもうひとりの男が殴りかかってくる。今度もかわして、男の腕を掴む。

「もっと痛みつけて欲しいなら止めないけど、あまり賢くはないよなあ」

腕を掴む手に徐々に力を込めていく。

「くっ！行くぞ！」

そして二人の男は去って行った。

「……。」

「みお？大丈夫？」

そらはみおの顔を覗くため離れようとするがそれはできなかった。

「もう少しこのままでいて……。」

「！」

「怖かったよ……私。男に腕つかまれた時声が出ないくらい怖かった……。」

「みお……。」

「でもそらはあったかいね。すごく安心」

みおはもう自分をコントロールできていなかった。今はただ好きな相手に頼りきっている

そらは思った。今なら告白してOKをもらえるのではないかと。

けれど、それはできなかった。みおを、目の前で泣いている幼なじみを抱きしめることしか考えられなかったのだ。

「……みおっち……。」

「みおちゃん気づいたんだね。これでは少しの勇気があれば大丈夫だ。」

二人はただ影から親友を眺めていた。

「わーおいしそー!!!」

「こらこら、後もう少し焼かないと」

時間は7時過ぎ。まだ夕日が照っているがだいぶ暗くなってきた。

予定通り夕飯のバーベキューをしている。

「いただきまーす」

「真央はせっかちだから」

「辛つつつ!!」

「だから言っただじゃんまだその玉ねぎ生だったんだよ」

「あ、これおいし。」

「秋人！それ俺狙ってたのに！」

「早いもん勝ちだよー」

「くう」

そんなこんなで楽しい(?)バーベキューは進んでいく。

「ふーだいぶ食べたねえ」

「ふっふっふー夏の夜ときたら？」

「きたら？」

「ジャーン!!」

真央が持っていたのはスーパーとかでもよく売っているような手持ち花火だった。

「じゃ、もう少し暗くなったらね。」

「うん！楽しみだなあ」

真央はすごく楽しそうだ。この時はみおも正直に楽しめていた。

第十四話 夏の夜と。

「わーきれい！」

完全に真っ暗になった9時ころに花火を始めた。

まず最初にひとつ、一緒に入っていた噴き出し花火をした。

色が何色にも変わり、暗闇に輝いている。

「次に線香花火！」

「おーし。じゃ誰が一番続くか勝負な」

男子は勝負事好きだなあと思いながらもみおは火をつける。

徐々に強くなっていき、綺麗さも増していく。線香花火のあの独特な匂いもまた風流があって良いものだ。

しかし次の瞬間、風がいきなり強く吹いた。
もちろん全員脱落。

「・・・気を取り直して次いこー！」

「あはは・・・」

しばらくこうして花火を楽しむ。ネズミ花火からガチで逃げ回る真央。花火の火をかけあう秋人とそら。どーでもいいけど、花火は人に向けてはいけないと思う。そして純粹に夏の夜に輝く光に見とれ

るみお。

あらかた終わったと思った時に、真央がまた何かを持ってくる。

「ジャーン！！今度はコレです！」

今度は少し大きめの筒状花火を何本か持っていた。

「あ、それって小型の打ち上げ花火？」

「そのとおり！」

「でもここじゃ危ないからもっかい海行こーか」

そしてまた徒歩五分。

「じゃー火つけるよー!!」

真央が点火をし、キャーと言いながらこちらへ走ってくる。

そして数秒後、夜空にパーンと少し大きめの音と共に花が咲いた。

4、5発終わると真央が少し残念そうな顔をする。

「・・・これで今年の花火大会はお終いです・・・。ねー来年もまた来ようね！」

「でも来年受験だよ？」

「みおっちそいうこと考えちゃうんだからこつこついう時くらい勉強忘れよーよ」

「真央は四六時中忘れてるけどな」

「むー秋人ひつどーい」

・・・終始真央は元気だった。

花火を終えてみんなでコテージに帰り、順番に風呂を済ませて、みおは割り当てた自室のベランダから空を眺めていた。

「よつす、みおちゃん」

「！秋人君」

「一応ノックしたんだけどなあ」

秋人もみおと並んでベランダに立つ。

「真央は？」

「もう寝ちゃったよ。まああんだけはしゃいでたし、今日くらいはいいかなって思ってたさ」

「真央つてばさつきいきなりお風呂に乱入してきて大変だったんだから」

「はは。楽しいんだよきつと。・・・明日は寝かせないけど」

となりでキラんと目を光らす秋人を見て、苦笑しつつまた空を眺める。

「みおちゃん、さつき凄かったね」

「さつき？」

「海で。・・・そらと」

「！！・・・見てたの？」

「悪いけどガッツリ見てました。」

「どーりでタイミングがいいと思ったよ」

夕方、みおがそらに抱きしめられ、そしてそらから離れた瞬間秋人達もやってきたのだ。

「つてことは真央も見てた？」

「Yes」

「うわー最悪」

「みおちゃん、気づいたんだよね」

「・・・うん」

「そっか。いつ伝えるの？」

「・・・次にアレを言われたら」

「アレ？」

「・・・あの悪魔の呪文」

「はは。それか・・・うまく行くよ」

「・・・。」

「じゃ俺もう行くね。あんま外出てると風邪ひいちゃうからほどほどにね」

「うん。おやすみ」

秋人は部屋から出て行く。

「みおっち・・・」

「お、真央。寝たんじゃなかったの？」

次にやってきたのは真央だった。

「うん・・・でもさつき怖い夢見ちゃったから一緒に寝よー」

「あんたは幼稚園児か！」

「もーそれでいいや。おやすみー」

そう言つて真央はみおのベットに倒れる様に寝入る。

「もー真央は・・・」

しょうがないと思いながら真央の顔を見つめる。

（一応真央も気づかってくれたんだよね）

柔らかい髪を撫でると真央は少しくすぐったそうに寝返りを打つ。

「私もそろそろ寝るか・・・」

と、その前にトイレに向かう。

トイレに向かうため、途中リビングに寄るとそらがココアを飲みながら椅子に腰掛けていた。

「あ、そら。」

「ん、ああみお。まだ起きてたの？」

「うん、でもこれから寝るよ。その前にちょっとトイレにね」

「そつか。アイスココア飲む？入れるよ」

「あ、じゃお願い。トイレ行ったら戻ってくるよ」

こつも異性の前でトイレ行くことを言えるのもすごいような気はするのだが。やはりそこは二人の長い付き合いがあつてこそだろう。

（ふう、にしてもずいぶん恥ずかしいことしちゃったよなあ）

みおは用をすませ、リビングに行く途中、夕方のことを思い出していた。

みおは何も意識せずともあのようなことをしてしまっていたのだから、実際後悔しても仕方ないのだが。

「あ、ありがとう」

みおはそらと向かい合うように座ると、そらがココアを置く。

「ねえみお。来てよかったでしょ？」

「うん。正直悔しいけどだいぶ楽しかった」

「悔しいって、みおは素直じゃないねえ」

「それが私だもん」

「ま、そんなみおも含めて大好きだけど」

「うっざー」

「ひっどー。ねえみお、俺と付き合って」

「うざー。けどいいよ」

「ははは。でもまだ諦めないけ・・・ん？今みおなんて言った？」

みおはグツとココアを飲み干す。

「じゃココアごちそうさま。おやすみー」

そういつて部屋を出て行く。

「ええ！ちよ、みお！」

悪魔の呪文・・・それは何度もささやかれた告白のことだった。

「みお！」

「ノックくらいしろ」

「あ、ゴメン。・・・ってそうじゃなくて、みおさっきなんて言った！？」

「ノックくらいしろ」

「そのずっと前！」

「うぎー」

「その一つ後！」

「君は二度も言わなきゃ分からないほどバカになっちゃったのかい？」

「ってことは・・・そういうことだよね？」

「そういうことだよ。」

「好きだよみお。」

「私も好きだよそら。」

「!!!!・・・やばい鼻血出そう」

「わかったから早く出てけ！私も眠いんだ」

「あ、ゴメン！」

そういつてそらは部屋を出て行く。

意外にもあれほど悩んだのに、二つの思いはいとも簡単に繋がった。

（嬉しんだけど、飛び跳ねたいくらいなんだけど、でも・・・みお冷たすぎ！）

そらはドアに寄りかかり一つ息を吐いた。

第十四話 夏の夜と。(後書き)

最近おきにいたり数と評価が伸びませんね・・・どうしたらいいんだろう・・・。

第十五話 優しい青い空、未だ鳴らぬ音。

小鳥のさえずりが聞こえてくる。そんな声で目を覚ますなんてなんて幸せなことだろう。もちろん起きればの話だが。

「いて！」

みおは痛みとともに目を覚ます。

その原因はすぐ隣に寝ているものにあつた。

「真央のやつ・・・」

横つ腹に真央の蹴りが入ったのだ。当の本人は気持ち良さそうに可愛い寝顔をしている。

だが、それはみおの怒りを煽るだけだった。

「起きろー！ー！！」

「痛たたー・・・」

「ふんっ」

寝ぼけながらも起きた真央にみおは力の限り頬をつねった。

「おはよーってどうした真央!？」

「あーきとー」

真央は秋人に抱きつく。

「言っとくけど自業自得だからね」

「ははは。何があったのか知らないけどね、ドンマイ真央」
「うっー」

朝からみおの機嫌は悪いものとなった。それなのに・・・。

「おはよーみお!」

「あ、そら、ってちょ」

そらが思いっきりみおに抱きつく。

「そら放してよ」

「いーやだ。」

「はあ。」

みおはしょうがないと思いながらも

「じゃなきゃ昨日の件は取り消す」

「!今すぐ離れます!」

サッとそらはみおを解放する。

「みおっち!どーいうこと?」

「みおちゃんそこんとこ詳しく」

真央と秋人が詰め寄る。

「あーもういいよ！私たち付き合うことにしたの！」
「ええー！！」

みおはもう吹っ切れていた。

「いいいい、いつのまに！？」
「昨日あの後？」

「はあ。めんどくさいな。あ、今日どこ行く？」
「そ・れ・よ・り・も」
「・・・」

結局みおは全てを話した。

その後ニヤニヤする二人をシカトしながら簡単な朝食を済ませる。

「今日はどうする？」
「また海つてのもの」
「だよねえ・・・」

んー。みおとそらは考え込む。ここは海には近いのだが、街からは結構離れている。

「思い切って海釣りとかは？」

「あ、案外いいかもよ？」

「まあ、ね。真央達もいい？」

「私たちもいいよ」

「俺も、真央と一緒になら」

「よしじゃあ行こー」

海の近くには防波堤がある。そして昨日見た限りでは近くに竿のレンタルもあったのだ。けれど素人には若干キツイかもしれない。

「竿四本お願いします！」

「あいよ。姉ちゃん達大学生かい？」

「いいえ、まだ高校生です」

「おや、じゃあダブルデートかい？」

「まあそんな感じかな。あ。おじさんありがとう！」

「じゃあサービスだよ。お金はいらなから楽しんでおいで」

「わーありがとー!!」

真央はほんとに愛想がいい。こういうときは得をするなあと真央を見ながら思うみお。

「んーとりあえず来てみたものの、実際釣りしてたことないんだよねえ」

「ええーみおつち無いのー」

「真央は？」

「ないよー」

うふふーと笑う真央。

「男性陣は？」

「あははー俺はないよ？」

そろも無いようだ……。残るは秋人……。

「ん？あれ秋人君は？」

先ほどから秋人の姿が見えない。と思ったらもうすでに海に糸をたらしていた。

「秋人釣りできるのー？」

「真央、静かに。」

真央は手で口をふさぐ。

そして次の瞬間さっそく一匹目を釣り上げた。

「……まだちっちゃいな……。」

「秋人すっごーい」

「まあよくじいちゃんと来たりしてたから……。よっ」と

秋人は魚を逃がす。

「あ、秋人逃がしちゃうの？」

「ああ。まだ小っちゃいからね。大っきいの釣れたら食べるけどね。」

「秋人君すごいねー」

「む、俺だって秋人より大物釣ってやるもんね！」

「あんたはガキか・・・」

「見ててねみお！」

「はあー。真央、私たちも始めよっか」

「そーだね。秋人ー教えてー」

「ん。えつとまずは・・・」

そして全員で釣りを始める。秋人はマイペースでどんどん釣って行く。そして二十分くらいしてみお達にも当たりが。

「お、きたー！」

「あ、一回止めて・・・今！回して！」

「うん！こうかな・・・えい！」

みおがさっそく釣り上げた。続いて

「やったー私も釣れたよ！」

真央も釣れたようだ。

「二人ともそのサイズならOKだから。そこの箱の中入れといて」
「わーい今夜はこのお魚だー！」

カパッとフタを開けるとそこにはもうすでに結構な量が入っていた。

改めて秋人の腕に感心する。

一方その調子は優れないようで……。

「うー全然釣れない……あ！来た！」

一気に釣り上げる。しかしお決まりの長靴。
ブチッ！

「だーれだー！海にゴミ捨てるやつは！」

「そらうつさい！」

「あ、ごめん……」

その後もそらは残念だった……。

「わーホント秋人すっごい！！」

「だよねえ」

「はは、今日は入れ食い状態だったからね」

結局みおは四匹、真央は三匹、そして秋人は数えきれないくらい釣った。

そらは……言うまでもないだろう。しいて言うならば海の清掃にだいぶ貢献していた。

「まだ四時くらいだしねー何しよっか？」

「なら……勝負だ秋人！」

「また釣りで？」

「いや、さすがにそれは。・・・サッカーで！」

「ボールは？」

「もちろんあるよ」

「じゃ、いつちょやるか」

勝負の方式は対一。先にベンチの上の空き缶に当てた方が勝ち。

「近くにこんな公園があつたとはね」

その公園はほとんど遊具がなく、その分結構なスペースがありほぼ空き地に近い感じだ。

「じゃ俺ボールな」

秋人ボールでスタートする。

秋人がドリブルを始めるとすぐさまそろそそ奪いに行く。

ポジション的に言えば、FWそびとMF

(秋人)となっている。

二人とも全国選抜候補に入っていて、互角と言える。

「お、チャンス」

秋人がシュートを打つ。が惜しくも外す。

「あー惜しい！秋人頑張れ〜！」
「そら根性見せるー」

しかしMFということもあり、多少は秋人のほうがドリブルはうまい。
けれどそれも負けていない。なんとか秋人の突破をふせいでは果敢に攻めて行く。

そして秋人が二本目のシュートを打つ。
これはコースも高さもちょうどピッタリだ。
あ、終わるな。とみおも思った。

けれど寸前のところでそらが追いつき、カットする。そして隙のできた秋人かわし、シュートを放つ。

少し離れたところからだったが見事綺麗に決まった。そこはFW。
シュートの精度では秋人に負けるわけにはいかないのだ。

「よっし！」
「あっちゃあ。」

「秋人お疲れ！惜しかったね」
「あ、今だいぶ汗かいてるから抱きつかないほうがいいよ？」
「秋人の汗なら大丈夫だもん」

さすがはバカカップル。ここでもその力を発揮している。

「あ、みお。俺も汗かいてるから抱きつかないほうがいいよ？」
「抱きつかねーよバカ」
「えーそこは真央さんみたく素直にさー」

みおは付き合ってもみおのままだ。

「えーでもみおっちさつきそら君のこと応援してたじゃん」

真央はニヤニヤしながら言う。

「あーうん。まあしてたけど。ま、好きな人のこと応援してもいいんじゃない？」

みおは天然なのか。はたして狙ってやっているのか。しかしそらにとっては会心の一撃だった。

「みおー！」

「うわ！さつき自分から抱きつかないほうがいいって言ったくせに」

「それはそれ。みお大好きだよ！」

「・・・やれやれ」

「そこは、私も！って言うところだよ」

「・・・私も好きだよそら」

「！」

そらは今度こそ凍りついた。

「みおっち言うようになったねえ」

「ほんと大胆だね」

「・・・それよりコレどうすればいいの？」

動かないそらをどうすべきか、ここはやっぱり・・・。

「よっこいしょ、と！」

みおはそらに蹴りを繰り出す。
そしてやっとならば覚醒する。

「はっ！みお？」

「あ、ゴメン痛かった？」

「ちよつとね・・・でも嬉しいよ」

「え、まさかのドM宣言？」

「いや、そつちじゃないよ！？さっきのこと。」

「ああ、そつちか・・・」

「もう！大好きだよ！」

「あーもう暑苦しいっつーの！」

カップルになったからにはこういう、イチャつきも増えるであろう。
みおはそれを全力で防ぐことがこれからの課題となるであろう。

そしてここに闘志を燃やすもの達が。

「みおつちめ！負けないよ！秋人！私たちももつとイチャイチャしよ！」

「ああ、俺もそらに負けちゃいけないしな！」

みおとしては闘志を燃やされても困るのだが。

その日の夜は釣って来た魚を焼いて食べることに。

「あー腹減ったなあ」

「そら全然釣れなかったもんね」

「あははーそら君地球環境にはいいことしたのにね」

「俺のあげるか？」

「うー秋人からもらうのは何か癪に障るな」

しかしそらの腹の虫は大音量で騒いでいる。

「しょうがないなあ。ほら私の分けてあげるよ」

「！み、みお・・・ありがとう・・・食べさせて？」

「あげんのやめるぞコラ」

「はい、自分で食べます」

「そら、みおちゃんに完璧に尻に敷かれてるよ・・・。」

「そのほうが長続きするらしいしいんじゃない？」

「じゃあ俺たちは短いのかな」

「大丈夫だよ。もし別れることになりそうになったら秋人をナイフで刺しても別れないから」

「それはどうかと思うけど。ま、別れることなんて絶対ないよ。だって俺たちは結婚するんだろ？」

「うん！」

真央が秋人の頬にキスをする。

「今夜は寝かせないよ・・・」

「うふふ、私も寝たくない」

このバカップルに勝るほどあまあまなカップルはいないと思う。

その後結局そらは秋人からも分けてもらい、あれほどあつた魚も今では0となっている。恐るべし高校生の胃袋。

その日の夜。みおはまたも夜空を眺めていた。

「はい、みお。」

「！、ありがとう」

そらが今日はアイスコーヒーを差し出してくれた。さすがは幼なじみ。角砂糖一粒に、ミルクを少し。一番みおが好きな味だ。

「明日にはもう帰るんだよね」

「ん。そうだね。だから私もこうして滅多に見れない星空を目に焼き付けて置くんのだ。」

みお達の住む街からでも星は見えないわけではないのだが、やはりこちらは空気が澄んでいてとても綺麗に見えるのだ。

「この旅行に来てよかったよ。・・・みおと付き合うことができたし。」

「私も、やっと自分の気持ちに素直になれた。」

「ねえみお・・・俺の名前、漢字知ってる？」

「ん。知ってるよ。何でも優しく包み込む青い空で、青空そらだよね？」

「うん、正解。」

「じゃあそらは私の漢字知ってる？」

「もちろん。未だ鳴ったことのない音。で
未音みおでしょ？」

「うん。」

「未だ鳴ったことのない音でも」

「青空が包み込めば迷わずに鳴らせるってか？」

「あはは。さすがみお。ビンゴだよ」

2人は見つめ合う。そしてそつと唇を重ねる。触れるだけの短いキス。

「あ、ゴメンそら。」

「ん？なにが？」

「あの・・・実は西森くんにファーストキス奪われちゃったんだよね・・・」

「え？拓哉にキスされたの！？・・・あいつ帰ったらぶつ殺す・・・」

「だから私もファーストキスはそらが良かった」

「ん？ああそれなら問題ないよ。俺たち一回前にキスしたじゃん」

「ええ！？」

「あ、でもあのときはみお寝てたか」

そうあのときとは、そらが始めてみおに対して異性としての感情を抱いた日のことだ。あのあと、そらはみおの寝ている間に唇を奪ったのだ。

「中学の時!？」

「あ、一応謝つとくね。ただあの時から俺はみおのこと好きだったんだよ。」

「そら……。私もこれからそらのことずっと好きでいるから。」

日頃はガードが高いみおだが、今は星空のおかげか、素直に話せている。

「ねえみお。もっとみおの音を聞きたいな」

「?どういうこと?」

「みおの未だ鳴ったことのない音、俺に聞かせて?」

「というと?」

「やろう。俺と」

「!!、そ、そそそそ、それは、その、あの行為をですか?」

「うん。」

「!!!」

みおの顔がまるで夕焼けのように赤くなった。

第十六話 突然の訪問者！！

Part 2（前書き）

更新遅くなってしまってどうもすみませんでした。今回少しR15表現が多いです（汗）重ね重ね申し訳ないです・・・。

第十六話 突然の訪問者！！

Part 2

「ふう。」

帰宅したみおはまず息を吐き、力を抜くようにして、ソファーに倒れこむ。

「ホントにするの？」

「うん。」

あの後2人はそらの部屋に入って並んでベッドに腰掛ける。みおはこれから行われるかもしれない初めての行為に内心そわそわせずにはいらなかった。

しかしそれはそも同じなようでさつきからは目を合わせてはそらしたりの繰り返しである。

「そらは初めてじゃないんでしょ？」

「ん・・・まあ」

「だよな」

みおは少しガツカリする。お互いが初めてならば多少は気にせずに済むかもしれないが、相手が経験者とあつてはどうしてもプレッシャーがかかってしまう。

「でも好きなやつとすんのは初めて・・・だからさ。・・・やつぱ緊張する」

「え？じゃ今まで好きじゃなかったのに付き合ってたの？」

「そうなるかな」

「ホントたらしだねえ」

恋愛経験のないみおとしては好きでもないのに付き合う感情が理解できなかった。

実際そらはみおを忘れるために付き合っていたのだから結局はみおへの思いを強めたことになったのだが。

「あー！」

「ん？どうしたの？」

「あれが無い・・・」

「あれ？」

「あの、そういうときに男につける特殊なゴムを・・・」
「！」

みおは顔を真っ赤にする。その用具から現実的なことが連想されてしまったのである。

「・・・いいよ」

「え!？」

「そらなら・・・別に生でも」

「!」

今度はそらの顔が赤く染まっていく。

「俺・・・我慢できないかもよ?」

「いいよ、今日は安全日だし」

男として情けないことを言ってしまったと思ったそらだったが、みおはそんなこと気にも止めずにそらをフォローしてくれている。

「・・・わかった」

「ただ・・・優しくしてね?・・・私処女だから」

「!・・・・・・了解。」

「ん・・・」

ふたりは唇を重ねる。

・・・そして少しして二人は繋がった。

――
「あー思い出しただけでも顔から火が出そう・・・」

まさか付き合った次の日に行爲に及ぶとは、あれほどバカにしていた真央達にも勝るほどだ。

「なーにが？」

「おわ！？」

いきなりしたソファアーの後ろからの声に思わず女らしくない声を出してしまう。

みおの留守中に侵入できる存在は一人しかいないだろう。

「みおーお父さんも知りたいなあ」

「げ！」

・・・今度はもう一人おまけで。

「頼むから連絡くらいいれてよ！」

「だってここは我が家ですもの。帰るのに連絡なんて必要ないですよ？」

「まあ確かに・・・ってちやうやろ！」

「お、ノリツッコミだ」

「お父さんも感心しない！」

「それより」

広輝はキリツと真面目な顔になる。

「そら君とはどこまでいったんだ？」

「！」

「そ、それは・・・」

「実はもう知ってたりして」

「またかよ！」

葵がまたもやケータイのメール画面を見せてくる。

『みおいただきましたー！（笑）あんな可愛いみおはじめて見ましたよ！』

なんと能天気なことだろう。普通相手の親にその行為をしたこと、ましてやこんなに軽く言えるものだろうか。

「あの馬鹿野郎・・・」

「お父さんが殴ってきてやる！」

「まあまあ広輝くん落ち着きなさいな。・・・でみお、ちゃんと避妊はしたんでしょうね？」

「！そ、それは」

「してないの！？」

「中には出されてないから！」

とても健全な高校生の会話ではないのだけれど、しかもそれを両親と。

「・・・次からは気をつけなさい。できちゃってからじゃ遅いんだから」

「っ、次って」

「い・い？」

「・・・はい」

「よし、そら君をバラバラにしてこよう」

「ちょ、お父さんストロップ！」

冗談抜きに実行してしまいそうな広輝を今度はみおが止めようとする。

その後なんとかみおの手料理を振る舞うということで終戦した。

しかしこれからもそらと付き合い合うということはまたするかもしれないことを考えなければならない。そしてこの先もその度こんなことがあると思うと少し頭が痛くなるみおだった。

しかしそれよりもっと大きな問題をみおは忘れていた。

第十六話 突然の訪問者！！

Part 2（後書き）

ちよつとこの頃忙しくてこれからも少し遅れることがあるかもしれませんが、絶対に最後まで書き上げるのでこれからもよろしく願います！

第十七話 会長

夏休みも終わりに近づき、それぞれ宿題に追われるもの、残りをのんびりと過ごすもの、わずかで貴重な時間が過ぎていく。

ちなみにみおは後者で家で寝っ転がりながら今集めている漫画を読んでいた。

「・・・終わった。んー。次の巻買いに行こっかな」

と、立ち上がろうとした時に携帯のランプが点滅しているのに気づいた。

「おっとメールだ・・・ってそらかい」

果たしてそれは彼氏からのメールに対する正常な反応か。本来もつと喜ぶべきだろう。

『今からそっち行っていい？宿題ヘルプ！』

そらからのメールは宿題を手伝えという内容。もちろんみおは「自分でやれ！！・・・っ」と

そして間髪置かずに返信がくる。それと同時にインターホンが鳴ったので先に玄関へ向かう。

「よっ！みお」

メールを確認すると

『返信こないからもう来ちゃった』

「せめてアポとれよ・・・」

「一応メールしたじゃん」

「OKしてない！」

「じゃ、会いたいから来たの」

「そーだよみおっち」

「うわっ真央！」

「俺もいるよー」

「・・・秋人くん」

そらだけでなく秋人と真央まで。
もちろん秋人たちも宿題目当てだ。

「・・・まあいいや上がって」

「・・・おじゃましまーす」「」

「じゃ部屋入っててよ飲み物持つてくるから」

「・・・ありがとうございまーす」「」

みおは冷蔵庫を開けて中をみる。中には飲物がコーラとオレンジジュースと麦茶。

「麦茶でじゅーぶん」

グラス四つに氷を入れて麦茶を注ぎトレイに置いて運ぶ。

「お待ちーっておい」

みおが部屋に入るとそこには、扇風機の前で涼んでる秋人、さつき
読んでた漫画を読む真央、そしてみおのベッドで寝転ぶそら。勉強
をしてない人々の姿が。

「てめえら何しにきたんだー！」

「みおのベッドいい匂いする」

「みおうちこの漫画続きは？」

「あーーーーーー」

ぶちっ

いかにもアニメのような効果音とともにみおの猛き雷が降ちる。そ
の日は一秒たりとも休憩はなかった。

そして夏休みも終わり、また新たな学期が始まる。

「・・・今までお疲れ。君は長生きしたよ」

享年1ヶ月12日。今、命が一つ空へと舞い上がって行った。みお
の目覚まし時計の中では最長寿だった。

散らばった時計を片付けて学校へと向かう。

「おはよーみおっち」

「あ、おはよー今日は朝練無いの？」

「まあ始業式の日ですから」

「だよな」

最初に教室に入ってきたのは真央。

そして次に秋人とそらが並んで入ってくる。

「おはよーみお」

「んー。って抱きつくな学校で！」

「じゃあ他の場所ならいいの？」

「・・・二人っきりの場所なら」

「そしたら襲っちゃうよー」

「じゃあもう触れんの禁止」

「ゴメンなさい冗談です」

みおLOVEのそらと、とにかく羞恥心を保護するみおの攻防は当然のようにみおがいつも勝利する。

「そら思いつきり尻にしかれてるな」

「そら君かわいそー」

「真央、そらに優しくするなんて妬けるなあ」

「ふふっ本命は秋人だけだよ」

そしてバカップルはキスをする。

この二人は一日に何回キスをするのだろう。なんならカウントして

やろうか、などとおもった時にいつの間にか登校していた琴美が近づいてくる。

「ねえ笠原さん」

「あ、琴美ちゃんおはよ」

「そら様と付き合ってます？」

「情報早いねえーまあ否定はしないよ」

「そうですか！ いやあ嬉しいです！ ついに実ったんですね！」

「あははー」

「あ、そういえば純菜先輩が呼んでました」

「純菜さんが？なんだろう」

「……音楽室にいるそうですが」

「ん。分かった行ってみるね。ありがとう」

「いえいえ」

琴美はビシッと敬礼しながらみおを見送る。

「失礼しまーす」

「みおちゃん。」

「何かようですか？」

「まあ少しお話をね。．．．そら君と付き合ってるの？」

「……またですか。……はい」

「そう……いきなりなんだけど別れてくれない？」

「え!？」

「邪魔なのよあなたが。学園の王子を独り占めなんて生意気じゃない」

い？」

「え……でも今まで彼女はいたじゃ」

「あれはそら君が本気じゃないのわかってたもの。でも今度は違う。」

「……嫌です」

「そう。じゃあ私があなたに何かしても知らないわよ？」

「それでも……別れません」

純菜はそれを聞いてみおとの距離を詰める。純菜が手を振り上げ、叩かれると思ったみおは反射的に目を閉じる。

しかし次にはみおは優しく撫でられた。

「合格よ」

「……へ？」

「ふふっ驚かせてゴメンね。あ、みおちゃんには話してないことがあったの。」

「？」

みおは頭にはてなを浮かべポカンとする。

そんなみおの様子を見てクスツと笑い純菜は続ける。

「私は会員番号001番、そら様ファンクラブのトップ、会長よ。」
「……ええええー！！！」

「みおちゃんには正直少し嫉妬したわ。でもこれからは幸せなそら君を見守るのも悪くないなーって思って」

「はあ。」

「でも私や副会長、琴美みたいにこうやって踏ん切りをつけられればいいけどファンクラブの中には本当にイラついて行動を起こそうとする人もいるのが現実。」

「本当ですか!？」

「ええ。まあそれを何とかするのが会長である私の役割よ。琴美にも頼んであるけどみおちゃん自身気をつけてね」

「……。」

「もう時間だわ。さ、お互い教室戻りましょ」

「……はい」

みおはその事実を伝えられて頭のなかにはいろんな考えが浮かんできた。どうすればそれを回避できるのか、考えを巡らす。女子は怖い。特に恋愛関係ではもはや制御が効かないくらいなのだ。

一番の解決法は別れる、ことなのだがみおにとってそんなことはあり得ないことだった。みおの中でその存在はかなり大きくなっているのだ。

第十八話 水面下では・・・（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます！！

第十八話 水面下では・・・

「うわあ露骨だなあ」

次の日みおが登校して下駄箱から靴を取り出そうとしたら中がびようが入っていたのだ。

冗談半分の軽い気持ちで覗いたら本当に入っていたので怪我はしなかったものの、なんだか複雑な心境になってしまう。

「おー女子って怖いねえ」

他人事のようにでもしなければ心が落ち着かないほどに。

その日はいろんな角度からの、かつ絶対にばれないような陰湿ないじめを見た。

教科書に書かれるいたずら書き、と言えればかわいいのだが、実際には心を傷つけるような内容ばかり。

真央やそら、秋人達という時は害は無いのだが、一人でいる時を狙ってヒソヒソ話、しかもわざわざ聞こえるように言ってくるので、なおさらたちが悪い。

みおも普通の女子。傷つきやすいのも当然なのだ。・・・けれどそら達にはあえて隠し通した。心配かけたくはない。けれども誰かに助けて欲しい。矛盾と迷いが頭の中を何回も往復している。

そんな日々が始まってもう一週間も経っていた。エスカレートこそしないものの、改善の余地は見られなかった。

「なんかみお浮かない顔してるけどどこかしたの？」
「！うん別に。」

「ふーん。じゃ悪いけど俺部活今日遅くまであるから、先帰ってて
「うん頑張つてね」

手を振るそらに手を振り返す。なるべく不安であることに気づかないように。

「ちょっと」
「！」

帰路で突然声をかけられ思わずビクツとする。

「西森君か」
「なんか久しぶりだね笠原ちゃん」

「なんか用？」
「そっけないな。・・・なんか最近変わったことない？」

「え！？」
「いじめられたりとか」

「！！・・・知ってたの？」

「まあ、とあるルートからね」

「・・・。」

「あ、安心してねまだそろも知らないみたいだから」

「そっか。・・・どうすればいいんだろうね」

「笠原ちゃんはどうしたいの？」

「・・・とりあえず今の状況を抜け出したい。でも別れたくはない」「じゃあなんでそらに伝えないの？」

「それは迷惑かけたくないから」

「ふーん。そらにとって迷惑になる？」

「うん。今は大事な時期だし、新人戦もあるし」

「・・・そらにとって笠原ちゃんに関わることは全部迷惑じゃないと思うよ」

「え？」

「笠原ちゃんと一緒にいるそらは輝いてる。それこそサッカーしてるとき以上にね。」

「・・・。」

「ま、笠原ちゃんがそうしたいなら止めないけどね。・・・」
二人の絆はそんな簡単なもんじゃないよ」

そう言って拓也は去って行った。

みおも歩く方向を180度変えた。

・・・階段を登り目的地に着く。

「あらみおちゃん」

「あ、笠原さんども」

音楽室には幸い純菜と琴美の、会長、副会長コンビがいた。

「ちょっと時間あります？」

「ええ。かまわないわよ」

「はい。私も。」

「あのことなんですけど」

「・・・ちょっと場所を変えましょうか。」

そして屋上へと場所を移す。

「で、どうしたの？」

「まさかひどいことに？」

「・・・まあいじめられてるのは知ってますよね？」

二人はコクつと頷く。

「で、どうしたら改善できるのかと」

「・・・やっと頼ってくれるんですね！」

「ふう。まあいくつか手は打ってあるんだけど」

さすがはトップ2だ。情報収集は伊達じゃない。

「すでにいじめをした生徒の特定は済んでいるし、制裁も加えたわ」
「でも次から次へと新手がでるので・・・こんなときに会員数が多いことがアダになるなんて、ホント申し訳ないです」

「そっか、ありがとう。」

「でも頼まれたから今度からは結構大胆な行動を起こせるわ」

「はい！これからはもっと活躍出来ますから」

やっぱり二人はすごく頼りになる。けれど、

「ううん。これからも今まで通り水面下での手伝いをして欲しいの。」

「「「？」」」

「二人からはときどき情報提供とあとは、アドバイス、をお願いしたいの」

「どうして？」

「これは越えなきゃいけない壁なんです。私自身が越えなきゃいけない」

「でも・・・」

「琴美。ここはみおちゃんの言うとおりにしましょ。」

「・・・はい。笠原さん！いつでもなんでも言ってくださいね！すぐに飛んで行きますから」

「あはは。ありがと。じゃ私行きますね」

「みおちゃん。一人で溜め込んでダメなのよ。無理だけはしないでね」

「はい、大丈夫です。ほんとにどうもです」

そう言って屋上を後にする。

第十九話　いつまでも、どこまでも。（前書き）

更新が今回かなり遅れてしまいました・・・

ホントにすみません（泣）

それでも読んでいただければ嬉しいです。

第十九話　いつまでも、どこまでも。

みおはまず自分から変わっていくことを決意する。

手始めに眼鏡をやめてコンタクトに切り替えた。

「みおどうしたの!？」

十数年一緒にいた彼氏兼幼なじみのそらからはずいぶん驚かれた。

「変・・・かなあ？」

「!全然っいつつも可愛いけどそれにも増して可愛いよ!」

「なんかちょっとひくけどまあよかった」

「ひどっ!素直に言っただけなのに!」

「はいはいありがとー」

「雑っ!」

最近あまり人目も気にせずに二人は騒いでいる。

そしてそれを見守るみおたちの親友二人。

「みおっち最近すごい可愛いねえ」

「みおちゃん元がかなりレベルが高いからね」。恋をすれば人は綺麗になるって言うけどこれはホント具体例って感じ」

「秋人浮気しちゃダメだよ!」

「バカだなあ真央は」

「ひどいよ・・・」

真央がうつむく素振りをするより先に秋人が真央を抱き寄せる。

「たしかにみおちゃんは可愛いよ。でもね真央より可愛いやつは全世界を探してもいないよ。」

「秋人・・・」

そして二人はキスをする。

そんな風景を朝から繰り広げているのだが、何気に一番辛いのは同じクラスメート達である。

同じクラスに超熱々カップルが、しかも二組もいるのだから同じ空間には居難くなるのも自然なことだ。

みおにはもちろんそんな気ないのだが。

なんとか日常生活を送ろうとしているみおだが、やはりストレスが溜まってくる。

最近はまだ前よりもマシになって教科書が破られたりすることはなくなつたが、まだ間接的ないじめは続く。

ありもしない良からぬ噂を立てられたり、しかもそれがそらや真央達にばれないように行われているのだからずっと仕方なまれている。

る。

それを誰にも不安も愚痴も漏らさずにいるのだからみおも辛くはな
ってくる。

けれど純菜や琴美の提案を断って自分で決めたことなのだからと責
任感と負けず嫌いな性格が働き、そしてそれが裏目に出て自分の首
を絞めてしまっている。

「みお？聞してる？」

「ん！へ！？」

帰り道いつも通りそらと一緒にのだがどうしてもそのことを考えて
しまい心ここにあらず、といった状態だ。

「もー最近なんかおかしいよ？」

「そ、そんなことないよ。少なくとも普段のそらよりはね。」

「んーそう？ならいいけど・・・」

思わずばれてしまいそうになったがなんとか回避でき、ホッと胸を
撫で下ろす。

けれどいつそばれてしまえばよかったと思っていた自分がいて、ど
んどん頭の中がこんがらがるばかりである。

家に着くなりすぐにベッドに倒れこむ。

「私はどうしたいの？西森君が言うとおり、ホントはそらに言っちゃえば楽なんだけど」

自分の気持ちに整理ができず、誰もいない空間でつぶやく弱音。最近回数が増えてきたそれは静寂の中へと溶けていく。

「うわ、朝から最悪な人に会っちゃったよ」

「ちよつと聞こえちゃうよ」

そんな風に言われることも最近は少くない。みおはなるべくそんな声を聞かないようにして冷静を装い、無視して通り過ぎるのだが

「えー何あの態度ー。自分が言われてるって気づいてないのぉー？」
「声おつきいってば」

二人の女生徒は大声をあげて笑っている。

「なんかむかつくなあ、・・・それ！」

「！」

「あ、ごっめーん」

カバンをぶつけられ、態勢が崩れそうになるのをなんとかこらえる。そしてまた歩き出す。

「ちっ！・・・これならどう・・・よ！」

今度は完璧にぶつかられ、思わず階段から足を踏み外してしまう。

「キャ！」

踏ん張ろうとしたときにはもうすでに手遅れだった。抵抗する術をなくしたみおはそのまま階段から落ちる。

「うわ！やっぱいやっちゃった！行こ行こ！」

「逃げよ逃げよ！」

二人の女生徒は走り去って行った。

「くっ・・・」

かろうじて意識はあるものの自力では立てそうになかった。朝も早く運動部はいるものの朝練中なため誰も通ರಿかからない・・・

「みお！・・・！」

はずだったのだがなんとタイミングよく王子様が現れる。

「大丈夫！？」

「そら・・・。あはは・・・ちょっと転んじやって」

「立てる？」

「ちよつと無理みたい・・・」

「ホント！？・・・とりあえず保健室行こつ！」

そらはみおを横抱き、いわゆるお姫様抱っこをして保健室へと連れて行く。

「失礼しまーす！・・・やっぱまだ先生はいないか・・・」

保健室の鍵は常にかかっていないのではいることは出来るのだ。

「とりあえずベッドに横になって」

「うん、ゴメンねそら」

「何言ってるだよ、今日は朝練休むから大丈夫だよ」

「うん、ホントゴメン」

「・・・なんで転んだの？」

「えつといつもの貧血で・・・」

「ホント？」

「う、うん」

「・・・・・・嘘」

「え？」

「みお、嘘でしょ。ホントは落とされた、んじゃないの？」

「！見てたの？」

「スパイク取りに行つて見かけたから声かけようとしたら・・・ね」

「・・・。」

「だいぶ前からだよね？」

「それも知ってたの！？」

「当たり前じゃん何年一緒にいると思ってんの？・・・それにどうして」

「？」

「どうして俺を頼ってくれなかった!？」

「そ、それは・・・」

「迷惑だから、とかって言うのか!？むしろ言ってくれないほうが迷惑だよ！」

「そら・・・」

拓也が言ったことは正しかった。
そしてそらはみおを抱き寄せる。

「みおが辛いときには力になりたい。どっちかが辛いときには二人で支えあえばいい」

「・・・。」

「そうすれば・・・いつまでだって、どこまでだって、ずっとずっと二人でいられる」

みおの目からは一粒のしずくが落ちる。

人前ではあまり泣かないみおなのだがそらの前では何度泣いたことだろうか。

「未音。大好きだから」

「けて・・・」

「ん？」

「も、う、限界だ、から・・・辛かつ、だから・・・助け、て青空・・・」

「うん。もう大丈夫だからね。ありがとう」

今まで溜め込んでいたものが全部出ていった日だった。みおは思っ

た。そらがいねば、本当にできないことなんてないんじゃないかと。

第十九話 いつまでも、どこまでも。（後書き）

若干終わりが見えてきました・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0640x/>

幸せの定理

2011年11月8日02時02分発行